

出雲市中野町所在

## 中野西遺跡



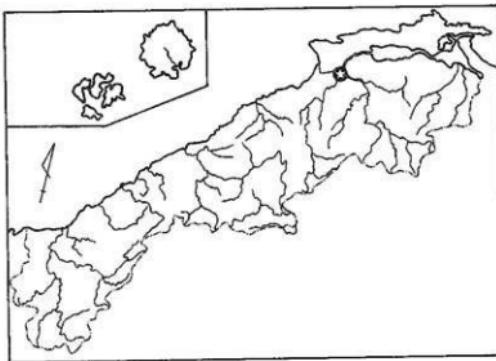
—出雲市北部第二土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—

2002年3月

出雲市  
出雲市教育委員会

出雲市中野町所在

## 中野西遺跡

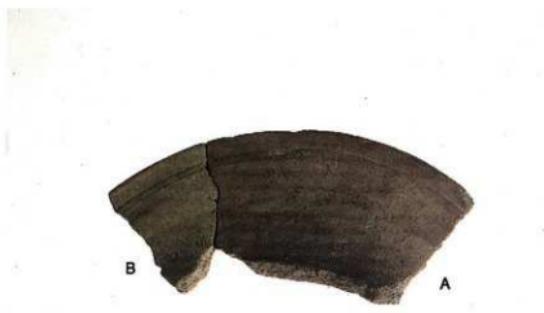


中野西遺跡の位置

—出雲市北部第二土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—

2002年3月

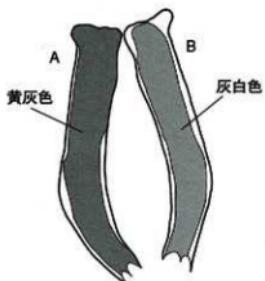
出 雲 市  
出雲市教育委員会



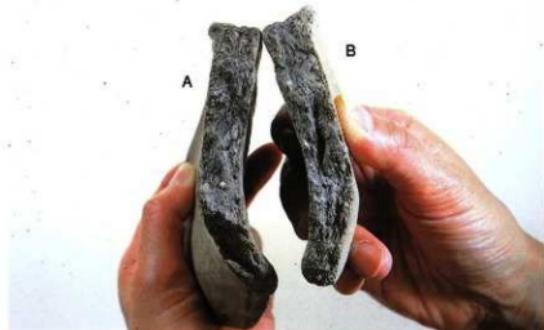
焼成時破損土器：外面



焼成時破損土器：内面



焼成時破損土器：断面  
(アミ掛は黒化層の範囲)





焼成破裂痕跡をもつ土器



焼成破裂痕跡をもつ土器（アップ）

## 序

中野西遺跡は、出雲市の北東部に位置する中野町に位置しています。この度、出雲市北部区画整理事業に伴う発掘調査を実施した結果、弥生時代を中心とする土器などの遺物が多く出土しました。また、出雲市内での出土例が少ない古墳時代中期の土器も出土し、この地域における人々の暮らしを復元できる成果となりました。

出雲市では、近年増加している開発事業に伴い重要な文化財が少しづつ破壊されているのが現状です。やむを得ず破壊される遺跡については、発掘調査等によって記録保存し、その貴重な文化財を後世に伝えていくことが我々の使命であります。

このために、市民のみなさまのご理解とご協力が必要です。今回刊行することになりました報告書が、古代出雲を考える上で少しでも寄与できることがあれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、地元の方々、ならびに関係機関にたいして厚く感謝申しあげます。

平成14年3月

出雲市教育委員会  
教育長 多久 博

## 例　　言

1. 本書は、出雲市役所北部区画整理課の委託を受けて、出雲市教育委員会が平成12年度に実施した、出雲市北部第二区画整理事業に伴う発掘調査の調査報告である。

2. 発掘調査を行った地番は次の通りである。

出雲市中野町 690-3外3筆

3. 現地の発掘調査は平成12年7月に着手し、同年9月に終了した。室内整理作業及び報告書作成は平成12年度～平成13年度に行なった。

4. 調査組織は次の通りである。

調査主体　出雲市教育委員会

事務局　大田　茂（文化振興課長：平成12年度）

板倉　優（芸術文化振興課長：平成13年度）

川上　稔（文化振興課長補佐：平成12年度）

川上　稔（芸術文化振興課文化財室長：平成13年度）

調査指導　池淵俊一（島根県教育庁文化財課主事：平成12年度～平成13年度）

調査員　坂本豊治（芸術文化振興課主事：平成12年度～平成13年度）

調査補助員　越尻幸平、鬼村奈津子（文化財室臨時職員：平成12年度～平成13年度）

5. 本書で使用した道筋略号は次の通りである。

SK…土坑　SE…井戸

6. 本書で使用した挿図の方針は真北であり、レベルは海拔である。

7. 本書の執筆、編集は坂本が行った。

8. 遺物整理にあたっては、田崎博之、村上恭通（愛媛大学）、平石充、丹羽野裕（以上、島根県古代文化センター）、内田智雄、

松山智弘、林健児、仁木聰（島根県埋蔵文化財調査センター）からご指導、ご協力賜った。記して謝意を表す。

9. 発掘調査、遺物整理等にあたっては、次の方々に従事していただいた。

発掘調査　吾郷剛生子　有出俊夫　今岡春義　奥田利晃　勝部武太　勝部初子

桐原竹夫　神門幸子　米間達夫　騎孝二郎　上代　勇　高橋イキコ

高橋ナツエ　宝生千賀子　二嶋文子　森山貞治　吉川善美

整理作業　阿久津洋子　飯塚陽子　石川桂子　河井栄子　田部美幸　永田節子　吹野初子

## 本文目次

序

例言

目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 位置と環境 ······ 1

第2章 調査の経緯 ······ 2

第3章 調査の概要 ······ 4

第4章 調査の結果 ······ 4

Ⅰ. 1区の調査

Ⅱ. 2区の調査

第5章 まとめ ······ 35

図版 ······ 図版 1 ~ 13

# 挿図目次 図版目次

第1図中野西遺跡周辺の遺跡分布図	2
第2図中野西遺跡調査区位置図	3
第3図中野西遺跡調査区平面図	5~6
第4図SK01遺構図・出土遺物実測図	7
第5図SE01遺構図	7
第6図土器溜り1出土状況図	8
第7図上器溜り1出土遺物実測図	8
第8図上器溜り2出土状況図	9
第9図土器溜り2出土遺物実測図	9
第10図土器溜り3出土状況図	9
第11図上器溜り3出土遺物実測図	9
第12図土器溜り6出土状況図	10
第13図上器溜り6出土遺物実測図	10
第14図土器溜り7出土状況図	11
第15図上器溜り7出土遺物実測図	11
第16図1区4層出土遺物実測図	12
第17図1区5層出土遺物実測図(1)	14
第18図1区5層出土遺物実測図(2)	16
第19図1区5層出土遺物実測図(3)	17
第20図1区5層出土遺物実測図(4)	19
第21図1区5層出土遺物実測図(5)	20
第22図1区5層出土遺物実測図(6)	21
第23図1区5層出土遺物実測図(7)	22
第24図2区4層出土遺物実測図(1)	24
第25図2区4層出土遺物実測図(2)	25
第26図2区5層出土遺物実測図(1)	26
第27図2区5層出土遺物実測図(2)	28
第28図2区5層出土遺物実測図(3)	30
第29図2区5層出土遺物実測図(4)	32
第30図2区5層出土遺物実測図(5)	34

表	目	次
表1 中野西・中野美保遺跡の消長表	36	
表2 中野西・中野美保遺跡の消長表	36	

表紙	「×」印をもつ弥生土器
巻頭	1 器面の色調が違う土器：外面 器面の色調が違う土器：内面 器面の色調が違う土器：断面
巻頭	2 焼成時破裂土器
図版	1 1区調査前(西より) 1区土層 SK01上器出土状況
図版	2 SE01検出状況 SE01完掘状況 上器溜り1出土状況
図版	3 上器溜り3出土状況 土器溜り6出土状況 1区完掘状況(西より)
図版	4 2区調査前(北より) 墨書き須恵器出土状況 2区完掘状況(北より)
図版	5 SK01 土器溜り1 土器溜り2 土器溜り3
図版	6 土器溜り6 上器溜り7 1区4層出土遺物
図版	7 1区5層出土遺物
図版	8 1区5層出土遺物
図版	9 1区5層出土遺物
図版	10 1区5層出土遺物 2区4層出土遺物
図版	11 2区4層出土遺物(墨書き須恵器)
図版	12 2区5層出土遺物
図版	13 2区5層出土遺物

## 第1章 位置と環境

中野西遺跡は出雲市中野町690-3の他に所在し、出雲平野の斐伊川左岸の後背低地に位置する。南北を中国山地と島根半島に、東西を宍道湖と日本海によって囲繞された出雲平野は、中国山地に源流を辿りかつてともに日本海に注いでいた斐伊川・神戸川の沖積作用により形成された沖積平野である。沖積作用が開始されたのは約3600年頃前と推定されており、それ以前は日本海から現在の松江市辺りまでは古宍道湖が占めていたと考えられていることから、遺跡が出現する箇所は出雲平野形成と密接に関わっているようである。

出雲平野で人々が暮らし始めたのは、縄文時代早期末の菱根遺跡（大社町）、上長浜貝塚（出雲市）が知られている。この頃の出雲平野は、古宍道湖湾が占めていたと考えられ、遺跡は山麓付近に限られていたようである。前期末～中期にかけては縄文海進にあたり、平野部のほとんどが海域となり遺跡は上ヶ谷遺跡（斐川町）で確認されているのみである。海進後、海退が進み後期～晚期にかけて平野部の南丘陵に御陵田遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、後谷遺跡、平野部に矢野遺跡、蔵小路西遺跡、浅柄遺跡などの遺跡が確認されている。

弥生時代前期には縄文時代から続く矢野遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、蔵小路西遺跡、浅柄遺跡などに加え、新たに出現する原山遺跡、中野美保遺跡、角田遺跡、古志本郷遺跡、田畠遺跡などがある。中期～後期の遺跡としては、白枝荒神遺跡、天神遺跡、下古志遺跡、古志本郷遺跡、小山遺跡、矢野遺跡など遺跡が拡大し、環壕をもつ集落が形成される。中期後半～後期の木製造品が海上遺跡、姫原西遺跡で多く出土している。また、西谷3号墓を中心に四隅突出形墳丘墓が平野の南丘陵上に築造されている。

古墳時代になると遺跡は減少する。前期古墳としては大寺古墳、山地古墳などが知られているものの、その数は少ない。前期末～中期の集落では井原遺跡や長廻遺跡、古志本郷遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、浅柄遺跡が、中期古墳としては池山古墳、西谷15号墳、北光寺古墳が知られている。後期になると今市大念寺古墳、上塩治築山古墳などの大規模な古墳が多数築造され、上塩治横穴墓群を代表する横穴墓が多数発見されている。後期の集落遺跡としては、三田谷Ⅰ遺跡が知られている。

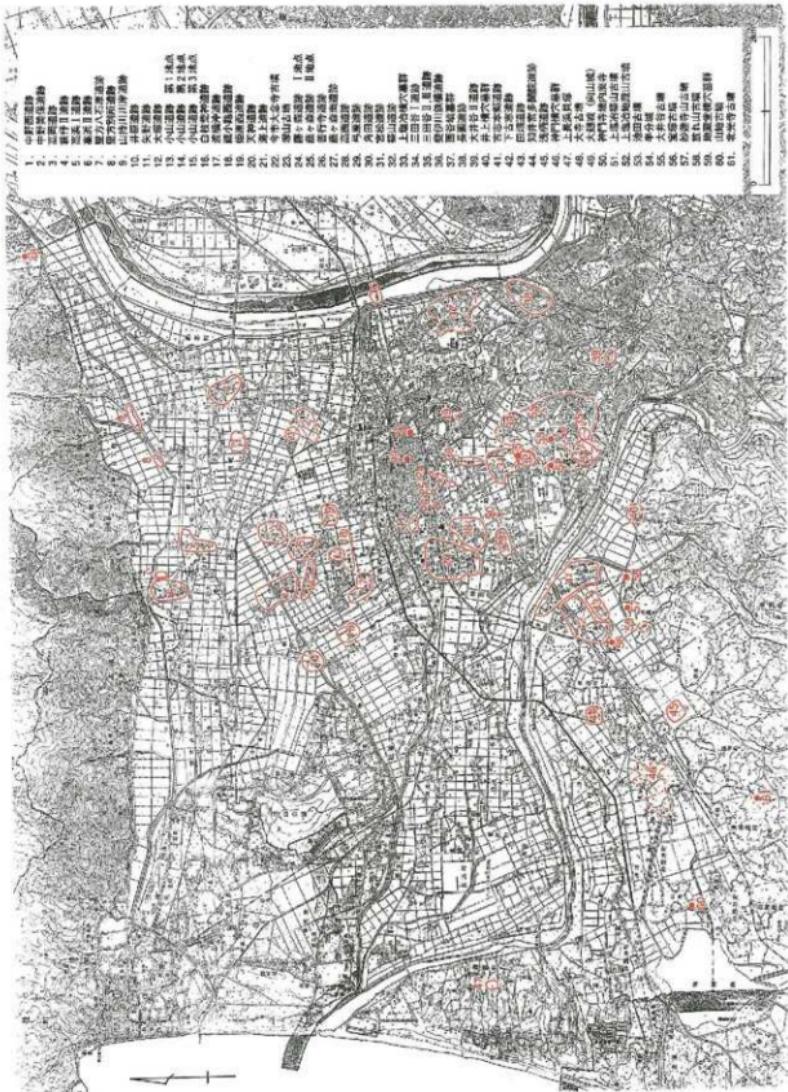
奈良時代では、近年の調査で光明寺3号墓から石櫃が発見され、既知の小坂古墳や朝山古墳とともに、出雲平野の火葬墓導入期の解明に進展をみせつつある。古志本郷遺跡では官衙跡と推定される大形の掘立柱建物跡が確認され、神門郡家との関連が注目されている。

中世では蔵小路西遺跡から、周囲を濠で囲繞した約1ヘクタールの規模を有する官跡が発見され、「中世朝山家惣領家」の居館である可能性が指摘されている。

今回調査した中野西遺跡は斐伊川の沖積作用により形成された後背低地に位置する。斐伊川中流域の左岸の遺跡としては、長廻遺跡、西谷墳墓群、中野美保遺跡などの発掘調査が行われている。中野美保遺跡では平成13年度の島根県埋蔵文化財調査センターの調査で四隅突出形墳丘墓や古代の水田が発見され、斐伊川流域の解明は徐々に進展している。

### 【参考文献】

米田美江子、三原一将編2001『一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書下古志遺跡』出雲市教育委員会



第1図 中野西遺跡周辺遺跡分配図

## 第2章 調査に至る経緯

出雲市は現在、市中心部の人口が減少し、周辺地区の人口が増加するドーナツ化現象が生じており、各地で無秩序なスプロール化が進行しつつある。そこで、出雲市中野町・大津町で区画整理事業を行ない、良好な市街地の形成を実現し、道路、公園、下水道等の公共施設整備の計画が持ち上がった。

こうした中で、埋蔵文化財の調整が始まったのは平成9年度であった。事業予定地近くには、周知の遺跡である太歳遺跡があり、事業予定地内にも埋蔵文化財が存在する可能性があるとし、事前に確認調査を実施する必要があると出雲市に回答した。そして、出雲市教育委員会では平成11年度～13年度にかけて道路予定地に90ヶ所のトレンチによる埋蔵文化財の有無について調査を行った。その結果、5ヶ所のトレンチから遺構・遺物を発見し、出雲市に2遺跡の存在と発掘調査の必要な旨を回答した。

協議の結果、中野美保遺跡を平成11年12月から、中野西遺跡を平成12年7月から発掘調査を行うこととなった。中野美保遺跡の調査報告書は平成13年3月にすでに発行済みである。

中野西遺跡の調査は1区を平成12年7月3日～8月4日、2区は8月7日～9月14日まで約2ヶ月半の発掘調査を行なった。



第2図 中野西遺跡調査区位置図

### 3章 調査の概要

中野西遺跡は北部第2区画整理事業の6m道路により開発されることとなり、約600m<sup>2</sup>を記録保存することになった。調査区は幅6m、長さが100mあり、途中で直角に曲がっている。調査前は水田として利用されており、現地は表土を除去した状態であった。

調査区は東西方向の6m×60mを1区、南北方向の6m×40mを2区とし、1区は1グリット～5グリット、2区は6グリット～10グリットに分けて調査を行い、遺物を取り上げている。

中野町地内は試掘調査の結果ほぼ同じ土層堆積をしていることがわかっている。水田の床土を重機により掘り下げると、斐伊川の氾濫による荒砂が堆積しており、この荒砂層からかなり湧水がある。荒砂層の下層から暗褐色粘質土が続く。遺跡の存在する場所では、暗褐色粘質土が薄く、地山層と考えられる灰色細粒砂層が堆積している。遺跡の存在しないところでは粘質土が数m続き、遺跡が存在するところが微高地であることがわかる。

また、このような土層は大変崩れやすいことから当該地は矢板なしでの調査は困難であり、中野西遺跡の調査にも矢板を打ち、安全を確保して調査を行った。矢板を打った後、重機で1層の褐色砂質土を除去して2層の青灰色粘砂土から人力による調査を開始した。

1区・2区とも基本層序は同じで水田面標高5.3mである。2層は中野美保遺跡の2層と同じ土質であり遺物を包含すると考えたが、掘削の結果、遺物は出土していない。遺物包含層は4層と5層で中野美保遺跡の3層と4層に対応している。地山層は6層の灰色細粒砂土である。

調査は湧水及び雨水流入が激しく、調査区は田植え期の水田状態であった。遺物が出土すると、その日の内に取り上げないと次の日は水が溜まり、また、水により流されたり、元位置を留めていないことなどもあり、水に悩まされた調査であった。

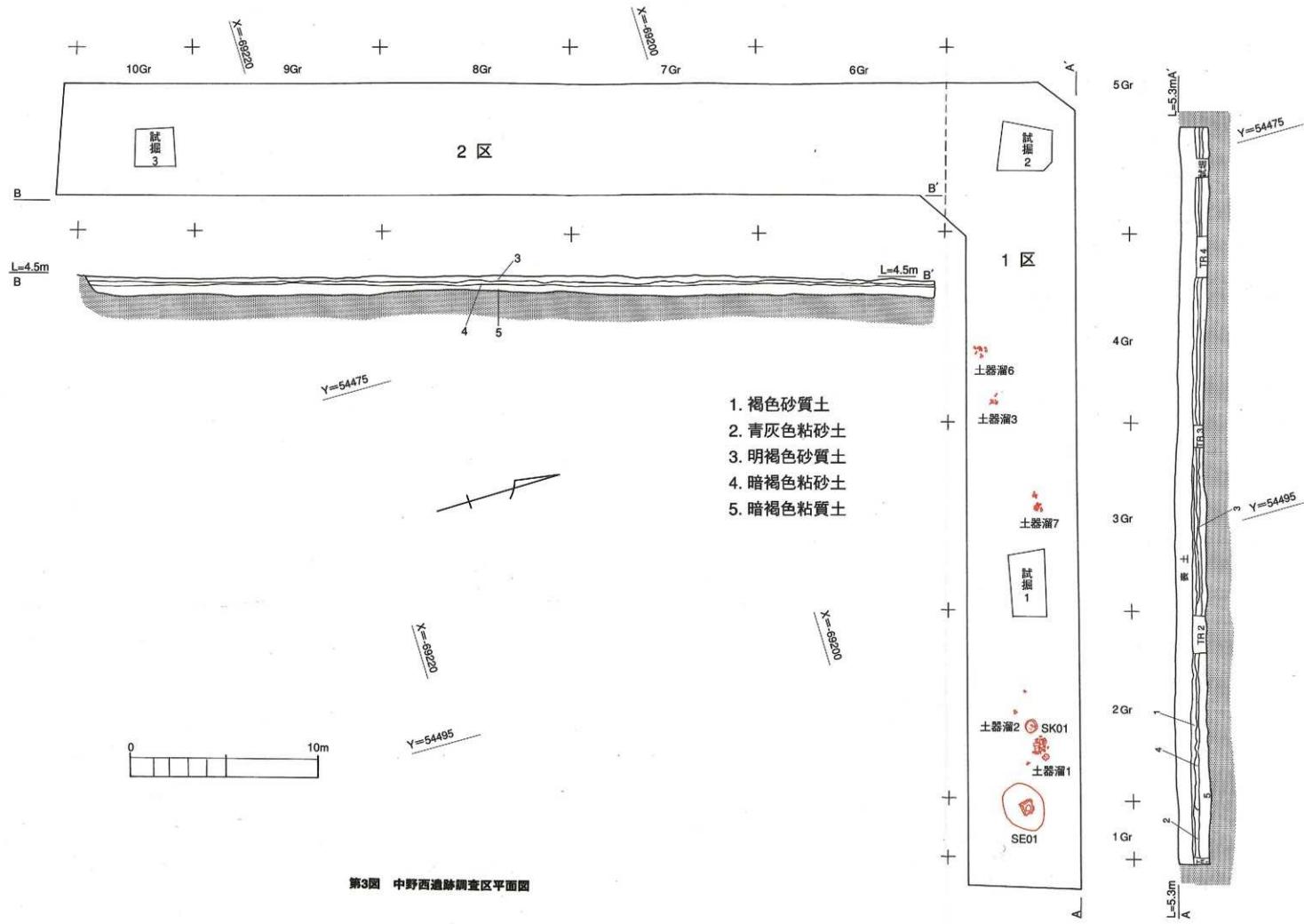
### 4章 調査の結果

#### I. 1区の調査

1区では遺構として土坑、井戸、土器溜りなどが出土している。4層、5層から弥生時代前期～平安時代までの遺物が出土している。土器溜りは5層から出土したものである。固体数が少ないものもあるが、別固体が近くで出土しているものを掲載している。遺物は多く出土しているが小破片で、4層では15点、5層では92点を図化している。

##### SK01（第4図）

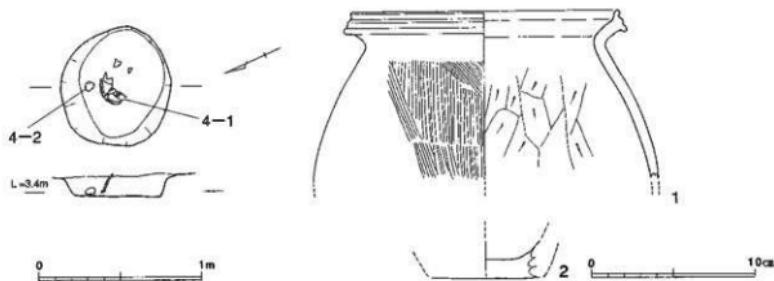
SK01は1区2グリット中央部に位置し、6層の灰色細粒砂土上面で検出した。平面形は梢円形をなし、長径約70cm前後で、深さは約12cmを測る上坑である。遺構埋土は暗褐色粘質土で5層と同じ土と考られる。埋土からは弥生土器が2点出土しており図化した。



第3図 中野西遺跡調査区平面図

第4図1は壺の口縁部～胸部上半にかけての破片である。口径約16.4cm、残高10.2cmを測る。屈曲部は「く」字状に屈曲し、口縁端部は上下に拡張され、2条の凹線文が施してある。焼成は堅緻、胎土は精製され、色調は浅黄色をなす。外面はタテハケメ、内面はケズリが施されている。2は壺の底部片と考えられる。底径は6.6cmを測るが、立ち上がる部分から欠損しており、粘土紐を積み上げる前の粘土盤の状態をなしている。胎土には1mm程度の長石・石英を多く含んでいる。

SK01の時期は第4図1の壺から弥生後期初頭（草田1期）と考えられる。



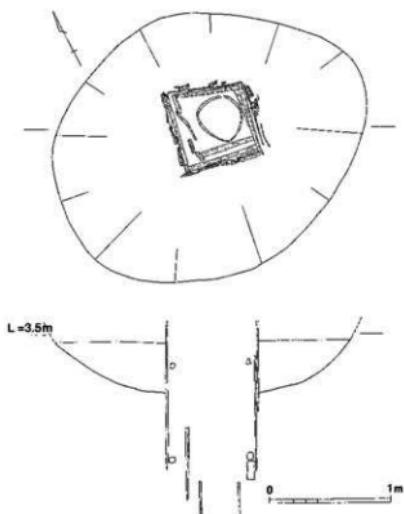
第4図 SK01遺構図・出土遺物実測図

#### SE01(第5図)

SE01は1グリットの6層上面で検出した。この遺構は井戸跡であり、木製の井戸側、水溜めが残っていた。井戸上部の掘り方は平面形が不整円形をなし、長径2.7m×2.2m、深さ1.4mを測る。埋土は暗褐色粘質土で、井戸の上部は残存していない。井戸の下部構造は井戸側が縦板組みで横桟により保持してある。縦板は2段組みで、横桟も断面円形、三角形の木材が2段組んである。水溜めには曲物が使用されていた。

SE01の掘り方は井戸側の上部までしか及んでいない。これは地山層（6層）が崩壊しやすい砂層であったことが考えられ、掘り方の底から、縦板を差し込み、内部の土を取り除いて井戸を作ったと推測できる。

SE01からは遺物が出土していないため、時期は不明である。このような下部構造をもつ井戸の時期は全国的に見て、弥生時代後期～近代でみられるようであるが、特に古代～中世に多く類例がある。

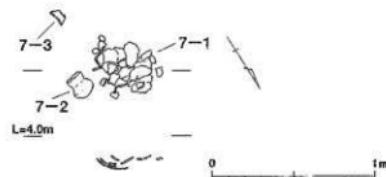


第5図 SE01遺構図

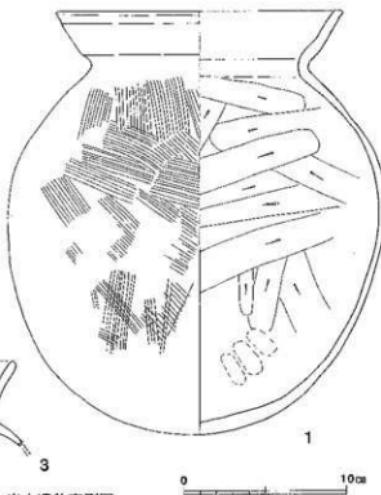
### 土器溜り1（第6・7図）

土器溜り1は2グリット5層で検出し、土師器3点を図化した。第7図1は壺形土器で、口径約17.4cm、器高26.2cmを測る。口縁は単純口縁で、肩曲部は「く」字状をなし、底部は丸底で、胴部は球形に近い。口縁端部は外方に肥厚し、器壁は厚い。外面は粗いハケメで横方向のハケメは確認できない。内面にはケズリが施され、底部には指頭圧痕が残っている。2～3は長口壺の破片である。2はほぼ完形で、口径12.4cm、器高15.5cmを測る。口縁部は直線的開き、端部は丸くおさめられ、ヨコナデが施されている。胴部は中位で最大径14.4cmを測り、粗いハケメが施されている。底部は丸底をなし、ハケメが施されている。胴部内面はケズリが施されている。焼成は良好で、胎土は精製されている。3は口縁部から胴部上半にかけての破片で、口縁部は直線的に開き、口縁端部は丸くおさめられている。口径約10cmを測り、2よりも器壁は薄い。焼成は堅緻で、胎土は精製されている。

土器溜り1の時期は古墳時代中期前半（松山Ⅲ期）と考えられる。



第6図 土器溜り1 出土状況図

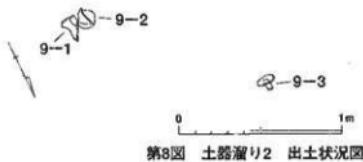


第7図 土器溜り1 出土遺物実測図

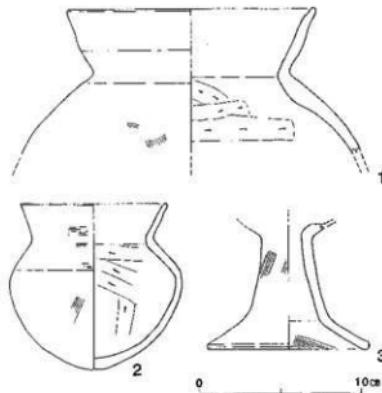
### 土器溜り2（第8・9図）

土器溜り2は2グリットの中央、SK01の西側で5層より検出し、土師器3点を図化した。第9図1・2は近接して出土しているが、第9図3はやや離れた出土状況をしている。

第9図1は壺の口縁部～胴部上半にかけての破片で、口径約15.4cmを測る。口縁部は単純口縁をなすが、複合口縁のなごりを残し、口縁部中央が膨らんでいる。全面に磨滅が著しいが、外面胴部上半にはタテハケメが、内面はケズリが施されている。焼成は軟質で、胎土には2mm程度の長石・石英を多く含む。2は小形丸底壺で、口径約9cm、器高10.2cmを測り、口縁部は短く直線的に開き、先細りしている。胴部上半で最大径をなし、底部は尖り気味の丸底である。口縁部にもハケメが施され、胴部にはタテハケメが施されている。3は高环の脚部で、环部と脚部は別作り（松山接合法γ）



第8図 土器溜り2 出土状況図



第9図 土器溜り2 土器遺物実測図

#### 土器溜り6（第12・13図）

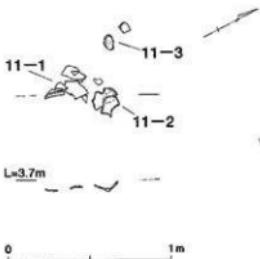
土器溜り6は4グリット5層で検出し、弥生土器4点を図化した。第13図1～4は甕である。1～3は屈曲部が「く」字状をなす口縁部～胴部上半にかけての破片である。1は口径約18.2cmを測り、口縁部は横方向に強く屈曲する。口縁端部は上下に肥厚し、3条の凹線文が施されている。内面にはケズリが施されている。2は口径約23.2cmを測り、口縁部は上方に拡張し、2条の凹線文が施してある。内面はケズリが施してある。3は口径約24.8cmを測り、口縁部は上方に拡張され、2条の凹線文

で、坏部を欠いた状態である。全面にハケメ調整が施されている。焼成は良好で、胎土は精製されている。

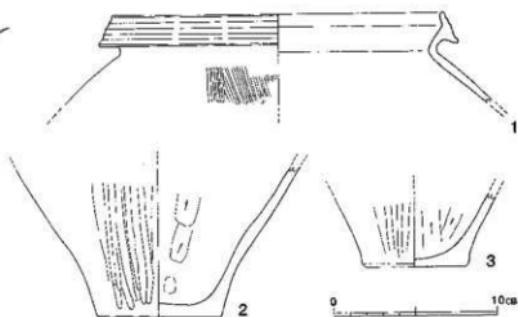
土器溜り2の時期は古墳時代中期前半（松山Ⅲ期）と考えられる。

#### 土器溜り3（第10・11図）

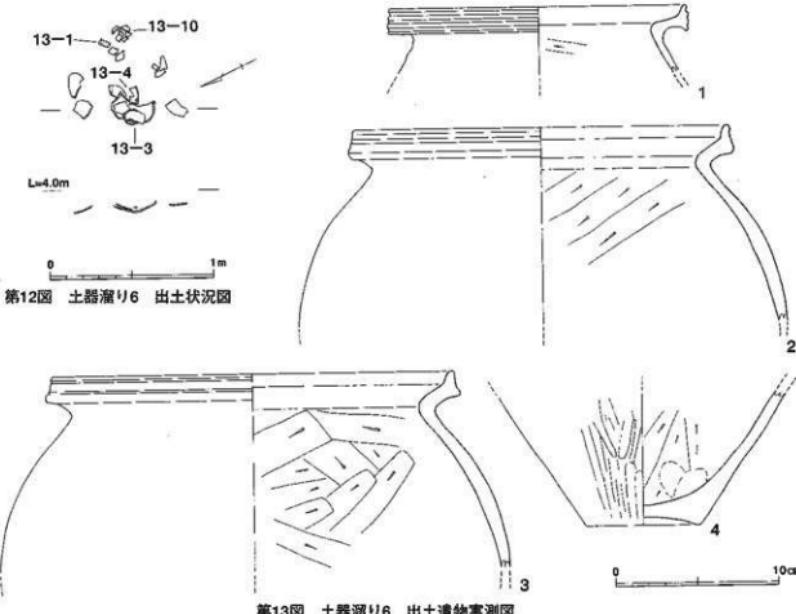
土器溜り3は4グリット5層で検出し、弥生土器3点を図化した。第11図1は屈曲部が「く」字状をなす甕の口縁部～胴部上半にかけての破片で、口径約20.2cmを測る。口縁部は上下に大きく拡張し、5条の凹線文を施している。胴部外面はタテハケメ、内面は磨滅している。浅黄橙色をなす。2・3は甕の底部片で、平底をなしくびれて立ち上がる。2は底径7.6cmを測る大形の底部である。外面はタテミガキ、内面はケズリが施されている。焼成は堅緻で、胎土は精製されている。3は底径6.2cmを測る。外面はタテミガキ、内面はケズリが施されている。焼成は堅緻で胎土は1mm程度の長石・石英を含んでいる。土器溜り3の時期は弥生後期初頭頃と考えられる。



第10図 土器溜り3 出土状況図



第11図 土器溜り3 出土遺物実測図



第12図 土器溜り6 出土状況図

第13図 土器溜り6 出土遺物実測図

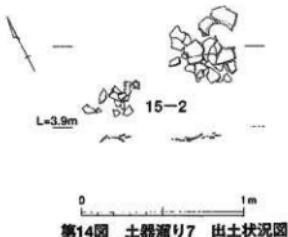
が施してある。外面は磨滅が著しく、内面はケズリが施してある。胎土は長石・石英を多く含み、色調はにぶい橙色をなす。1は底部片で、底径7cmを測る。底部は上底で、くびれず立ち上がる。外面はタテミガキ、内面はケズリが施されている。胎土は長石・石英を多く含み、色調はにぶい橙色をなす。

土器溜り6の時期は弥生時代後期初頭（草山1期）と考えられる。

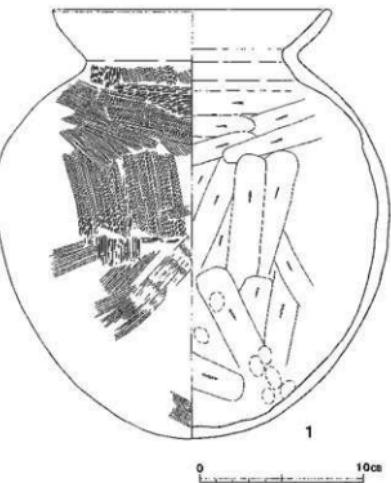
#### 土器溜り7（第14・15図）

土器溜り7は3グリット5層で検出し、土師器2点を図化した。第15図1・2は屈曲部が「く」字状をなす要である。1は胴部を一部欠くが、ほぼ完形で、口径17cm、器高26.4cmを測り、器壁は厚い。口縁部は内湾して開き、口縁端部は丸くおさめられている。屈曲部は強く押さえられて、幅をもつ。胴部は球形に近く、底部は丸底である。外面は、粗いハケメが施されている。胴部上半にはヨコハケメが途切れ途切れに施され、平行に固っていない。内面はケズリが施され、底部には指頭圧痕がある。焼成は良好で、胎土には2mm程度の長石・石英を含む。胴部と口縁部に光沢のある黒変部がある。2は口縁部～胴部上半にかけての破片で、口径約15cmを測り、器壁は厚い。口縁部は内湾して開き、口縁端部は横に引き出されている。外面胴部上半には粗いタテハケメが、内面にはケズリが施されている。焼成は良好である。

土器溜り7の時期は古墳時代中期前半（松山Ⅲ期）と考えられる。



第14図 土器窯り7 出土状況図



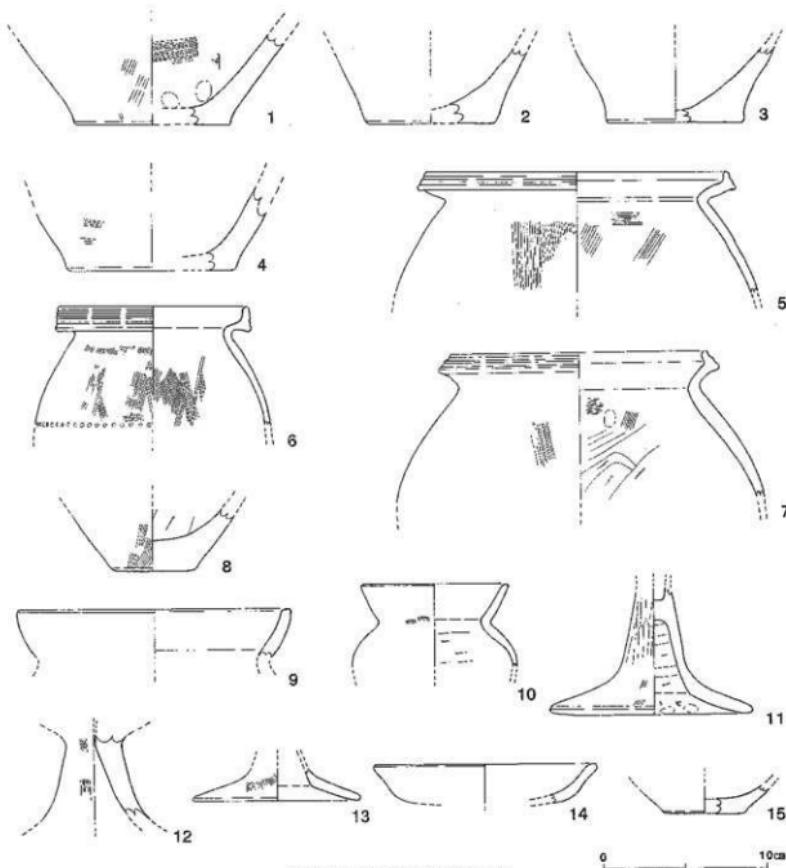
第15図 土器窯り7 出土遺物実測図

#### 1区4層出土遺物（第16図）

4層からは弥生時代前期～平安時代までの遺物が混在して小破片が多く出土している。実測可能な15点を図化した。

**弥生土器**（第16図1～8）1～4は底部片で、半底をなし若干くびれて立ち上がる。胎土は2mm程度の長石・石英を多く含み、色調は灰白色をなす。1は底径約9.5cmを測る。内外面ともにハケメを施しているが、外面は丁寧なナデを施している。2は底径約7.6cmを測る。磨滅が著しい。3は底径約8.3cmを測る。磨滅が著しい。4は底径約10cmを測る。外面にハケメが施してある。1～4の時期は弥生前期頃と考えられる。5～7は屈曲部が「く」字状をなす壺の口縁部～胴部上半にかけての破片で、焼成は堅緻である。5は口径約18.5cmを測り、口縁端部は上下に拡張され2条の凹線文が施されている。内外面ともにハケメが施され、内面には指頭圧痕がある。6は口径約11.5cmを測り、口縁端部は上方に直立して拡張され、4条の凹線文が施されている。胴部中位には櫛状工具等による列点文が施されている。内外面ともにハケメ調整が施してある。7は口径約15.7cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、2条の凹線文が施してある。外面はハケメ、内面は屈曲部下にハケメ・ナデ、その下にはケズリが施してある。時期は弥生中期後半（松本IV-2）と考えられる。8は壺の底部片で、底径5cmを測り、凸レンズ状の平底をなす。外面はハケメ後丁寧なナデが施され、内面はケズリが施されている。8の時期は弥生中期後半～後期前半と考えられる。

**土師器**（第16図9～15）9は単純口縁をもつ壺の口縁部で口径約16.6cmを測る。口縁部は内湾して開き、口縁端部は内面側が肥厚する。器壁は厚い。10は小形丸底壺の口縁部～胴部上半にかけての破片で口径約9cmを測る。口縁部は単純口縁で、口縁部は内湾気味に短く開き、口縁端部は先細る。外面はハケメを施した後、ナデ消し、内面はケズリが施してある。11～13は高環の脚部片である。11



第16図 1区 4層 出土遺物実測図

・12は壺部と脚部は別作り（松山接合法γ）と考えられ、脚内には粘土を充填している。12には刺突痕がある。13は裾部で外面にはハケメが施してある。9～13の時期は占墳時代中期と考えられる。14は円で、口径13.5cmを測る。内外面に赤色顔料が施してある。15は壺の底部片で底径約5cmを測る。全体に磨滅が著しいが、糸切痕が残る。14・15の時期は平安時代と考えられる。

#### 1区 5層出土遺物（第17～23図）

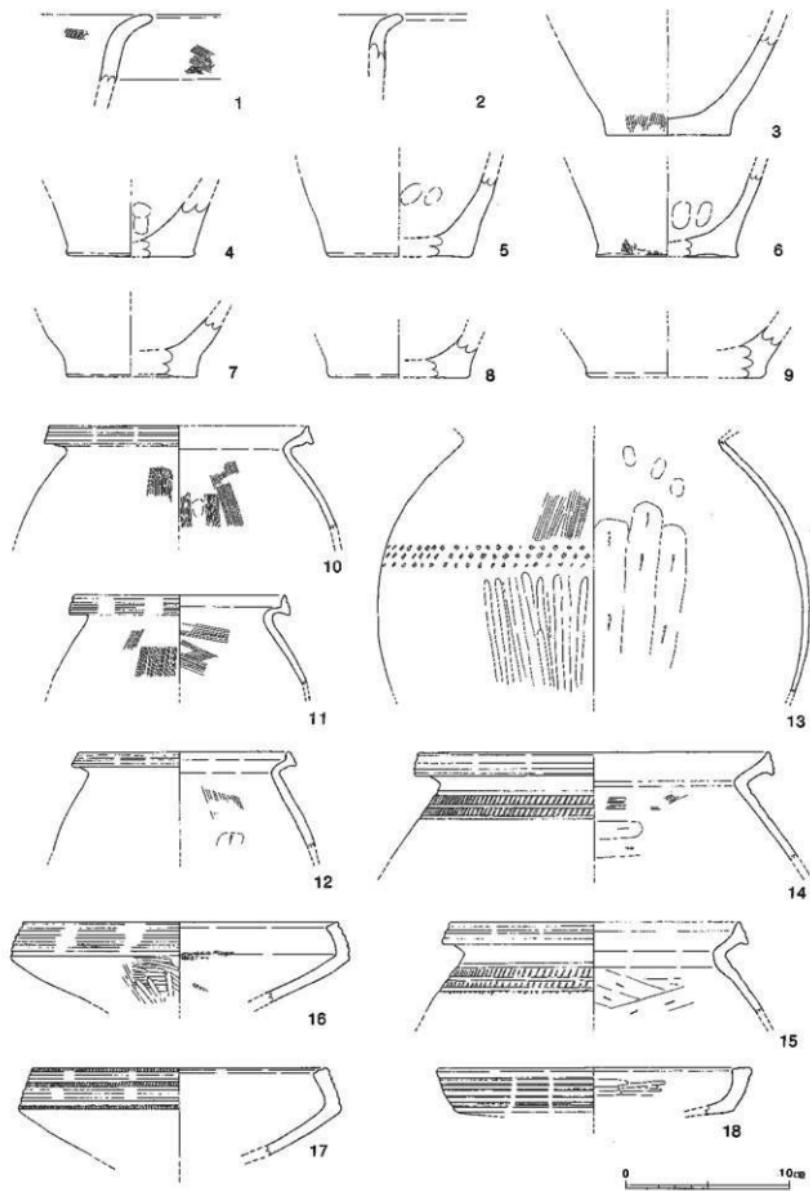
弥生土器（第17図1～第19図15）第17図1・2は如意形口縁甕の口縁部片である。胎土には2mm程度の長石・石英を多く含む。1は胴部には沈線が施されていると考えられるが、ちょうど段になっている所で欠損しており、はっきりしない。3～9は底部片で、ほとんどが平底でくびれて立ち上がる。胎土には2mm程度の長石・石英を多く含んでいて、器壁は厚い。色調は浅黄色をなす。3は大

きくくびれて立ち上がり、底径約7.6cmを測る。外面はハケメを施した後ナデしている。4は底径約8cmを測る。内面に指頭圧痕がある。5は底径約8.8cmを測る。外面は磨滅が著しく、内面には指頭圧痕がある。6は底径約8.8cmを測り、やや上底をなす。外面はハケメを施した後、ナデ消し、内面には指頭圧痕がある。7は底径約8cmを測り、大きくくびれて立ち上がる。内外面にナデが施してある。8は底径約8.4cmを測る。内外面にナデが施してある。9は底径約10.6cmを測る。内外面にナデが施してある。1～9の時期は弥生時代前期後半と考えられる。

第17図10～15は屈曲部が「く」字状をなす焼の口縁部～胴部上半にかけての破片である。10は口径約16cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、2条の凹線文が施してある。内外面ともにハケメを施しており、内面には指頭圧痕がある。11は口径約13cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、3条の凹線文が施してある。器壁は薄く、焼成も堅緻である。内外面ともにハケメが施してある。12は口径約12.8cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、2条の凹線文が施してある。全体に磨滅が著しいが、内面屈曲部下はハケメが、胴部中位にはケズリが施してある。焼成は軟質である。13は胴部片で胴部最大径26.5cmを測る。外面胴部上半には櫛状工具による列点文が施され、その上は、細かいハケメ、下はタテミガキが施してある。内面胴部上半はナデが施され、底部から胴部中位まではケズリが施してある。焼成は堅緻である。14・15は塙町式土器の影響を受けた土器で、胴部上半に刻目を施した後に、凹線文を3条施している。色調は灰白色をなす。14は口径約21.5cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、3条の凹線文が施している。磨滅が著しいが、内面屈曲部下はハケメ後ナデを施しており、すぐ下にはケズリが施してある。15は口径約17.7cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、2条の凹線文が施してある。内面胴部にはケズリが施してある。

第17図16～第18図6は高坏である。16～17は坏部である。16・17は口縁部が屈折し内傾して立ち上がる。16は口径約19.2cmを測り、口縁端部は左右に肥厚し、1条の凹線文を施している。口縁外面にも5条の凹線文を施している。外面はミガキ、内面はハケメ後ナデ消している。17は口径約18cmを測り、口縁端部は左右に肥厚し、2条の凹線文を施している。口縁外面にも5条の凹線文を施し、3段の刻目を施している。全体に磨滅が著しい。18は口縁部が内渦して開く。口径約19.2cmを測り、口縁端部は左右に肥厚し、2条の凹線文を施している。口縁外面にも6条の凹線文を施している。外面は赤色顔料が、内面にはミガキが施してある。第18図1～6は脚部である。1は脚柱部が筒状をなし、裾付近で広がる。脚径11.6cmを測り、脚端部は上方に肥厚し、1条の凹線文が施してある。脚柱部の沈線は上から9条、7条、14条の3段に施してある。内面には絞り痕がみられ、裾部はケズリが施してある。焼成は堅緻で、色調は灰白色をなす。2は脚柱部片で、沈線が上から8条、3条、4条、1条の4段施され、その沈線を施していない間に刻目や斜格子文を施してある。坏部との境には粘土を充填した痕跡がある。3も脚柱部片で、沈線が上から5条、9条の2段施されている。4～6は脚部の破片である。4は脚径約13.7cmを測り、脚端部は上下に拡張され、1条の凹線文が施してある。脚外面にはヘラによる「V」印があり、その下に凹線文が2条施してある。内面はケズリが施してある。5は脚径約11.5cmを測り、脚端部は肥厚しているが、丸く整形され、1条の凹線文を施している。6は脚径約18.2cmを測り、脚端部は上下に拡張され、2条の凹線文が施してある。

第17図10～第18図6の時期は弥生時代中期後葉（松本IV-2）と考えられる。



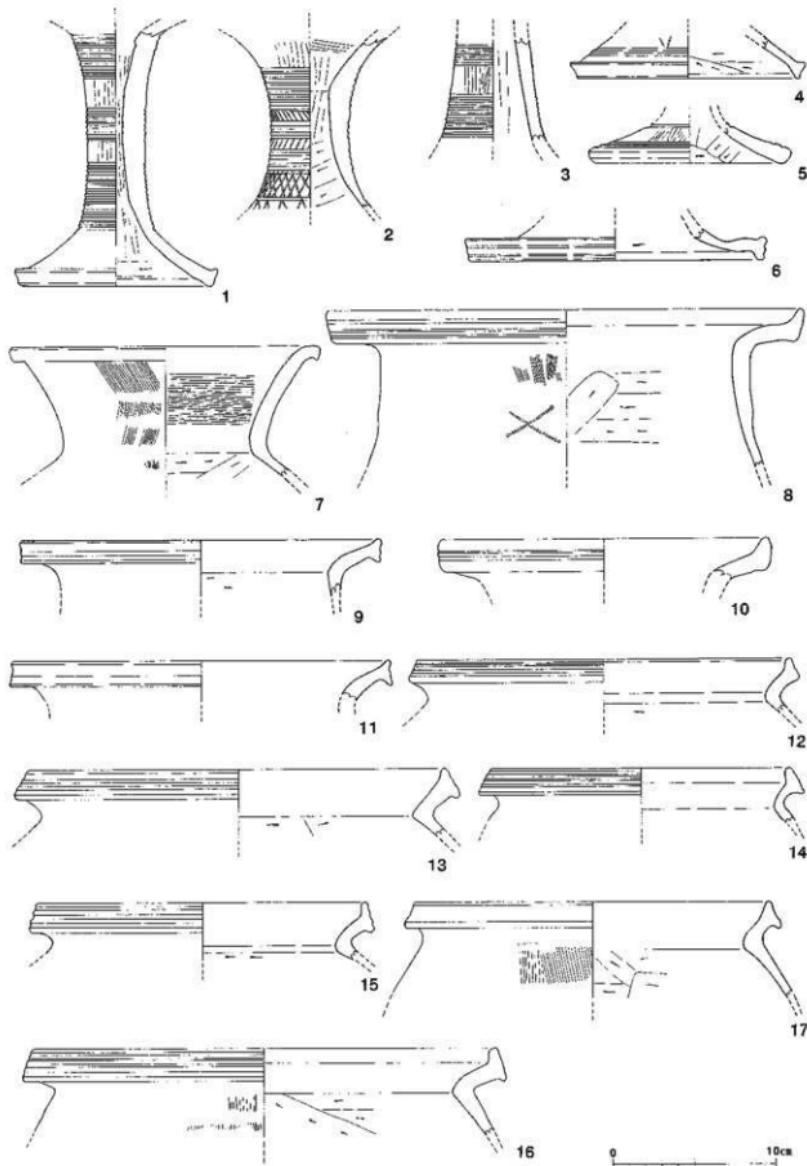
第17図 1区 5層 出土遺物実測図 (1)

第18図7～11は壺の口縁部～頸部にかけての破片である。7は直口壺の系譜を引くものと考えられ、口縁部は外反気味に開く。口径約19cmを測り、口縁端部は下方に肥厚し、面をなす。口縁部外面はタテハケメが、内面はヨコハケメが施され、胴部上半はケズリが施してある。8は円筒状の頸部から強く外側に屈曲する口縁部をもつ壺である。口縁端部は上方に拡張され、3条の凹線文が施されている。頸部には櫛状工具による「×」印が施されており、このような文様を施す土器は知られていない。外面はハケメ、内面はケズリが施してある。焼成は軟質で、色調は灰白色をなす。9・10も8とほぼ同じ器形をなす。9は口径約22cmを測り、口縁端部は上方に拡張され、2条の凹線文を施している。頸部内面にはケズリが施してある。10は口径約20.3cmを測り、口縁端部は上方に拡張され、2条の凹線文が施してある。11は頸部がやや内傾しながら長くなる壺と考えられる。口径は約23.2cmを測り、口縁端部は上方に拡張され、浅くナデられている。

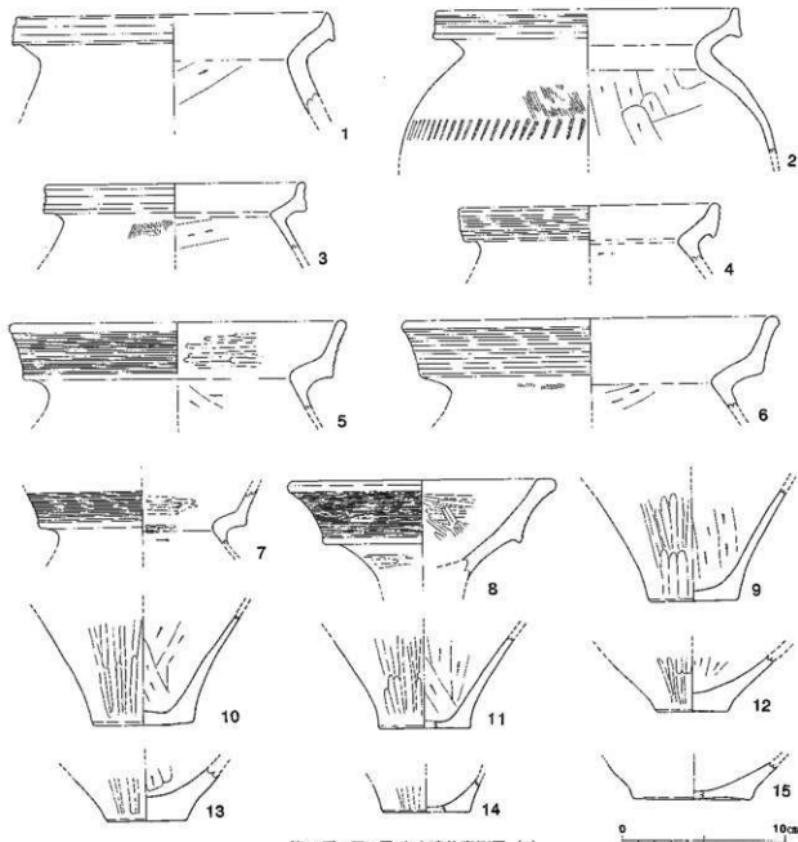
第18図12～第19図4は屈曲部が「く」字状をなす壺の口縁部～胴部上半にかけての破片である。第18図12～16は口縁端部の拡張面が内傾するものである。12は口径約23cmを測り、口縁端部は上方に拡張され、3条の凹線文が施してある。全面に磨滅が著しい。色調は明褐色をなす。13は口径約22.5cmを測り、口縁端部は上下に拡張され3条の凹線文を施してある。外面には煤が付着し、胴部内面はケズリが施してある。焼成は堅緻で、色調は暗褐色をなす。14は口径約18.5cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、4条の凹線文が施してある。焼成は軟質で、色調は灰白色をなす。15は口径約20cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、口縁端部には3条の凹線文が施してある。胴部内面にはケズリが施してある。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色をなす。16は口径約28.4cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、口縁端部には4条の凹線文が施してある。外面はハケメ、内面はケズリが施してある。焼成は良好で、色調は灰黄色をなす。17は口径約22cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、浅くナデられている。外面はタテハケメ、内面はケズリが施してある。焼成は良好で、色調は灰黄色をなす。第19図1～4は口縁端部の拡張面が直立気味のものである。第19図1は口径約19.4cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、口縁端部には3条の凹線文が施してある。器壁は厚い。内面はケズリが施してある。焼成は良好で、色調は灰黄色をなす。2は口径約18.8cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、口縁端部には4条の凹線文が施してある。胴部上半にハケメ工具の小口による列点文が施されている。外面はハケメ、内面はケズリが施してある。焼成は良好である。3は口径約16.2cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、口縁端部には3条の凹線文が施してある。外面はハケメ、内面はケズリが施してある。焼成は良好で、色調は暗褐色をなす。4は口径約16cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、口縁端部には5条の凹線文が施してある。内面はケズリが施してある。焼成は良好で、色調は灰黄色をなす。

第18図7～第19図4の時期は弥生後期初頭（草田1期）と考えられる。

第19図5～7は口縁部が複合口縁状をなす壺の口縁部～胴部上半にかけての破片である。5は口径約20.9cmを測り、口縁部は複合口縁化し、口縁部外面には10条の擬凹線が施してある。内面は口縁部がヨコミガキ、胴部上半にケズリが施してある。焼成は堅緻で色調はにぶい黄橙色をなす。6は口径約23.2cmを測り、口縁部は複合口縁化し、口縁部外面には10条の擬凹線が施してある。全面に磨滅しているが、内面胴部上半にケズリが施してある。焼成は軟質で、色調はにぶい黄色をなす。7は口縁



第18図 1区 5層 出土遺物実測図 (2)



第19図 1区 5層 出土遺物実測図 (3)

端部を欠いている。口縁部外面には8条以上の擬凹線が施してある。内面は口縁部がヨコミガキ、胴部上半にケズリが施してある。焼成は堅緻で色調はにぶい灰白色をなす。

第19図8は鼓形器台の器受部である。口径約16cmを測り、器受部は複合口縁状をなす口縁端部は平面をなし、外側に引き出されている。器受部外面には17条の擬凹線が施されている。外面筒部・内面はヨコミガキが施してある。焼成は堅緻で、全面に光沢のある黒変部がみられる。

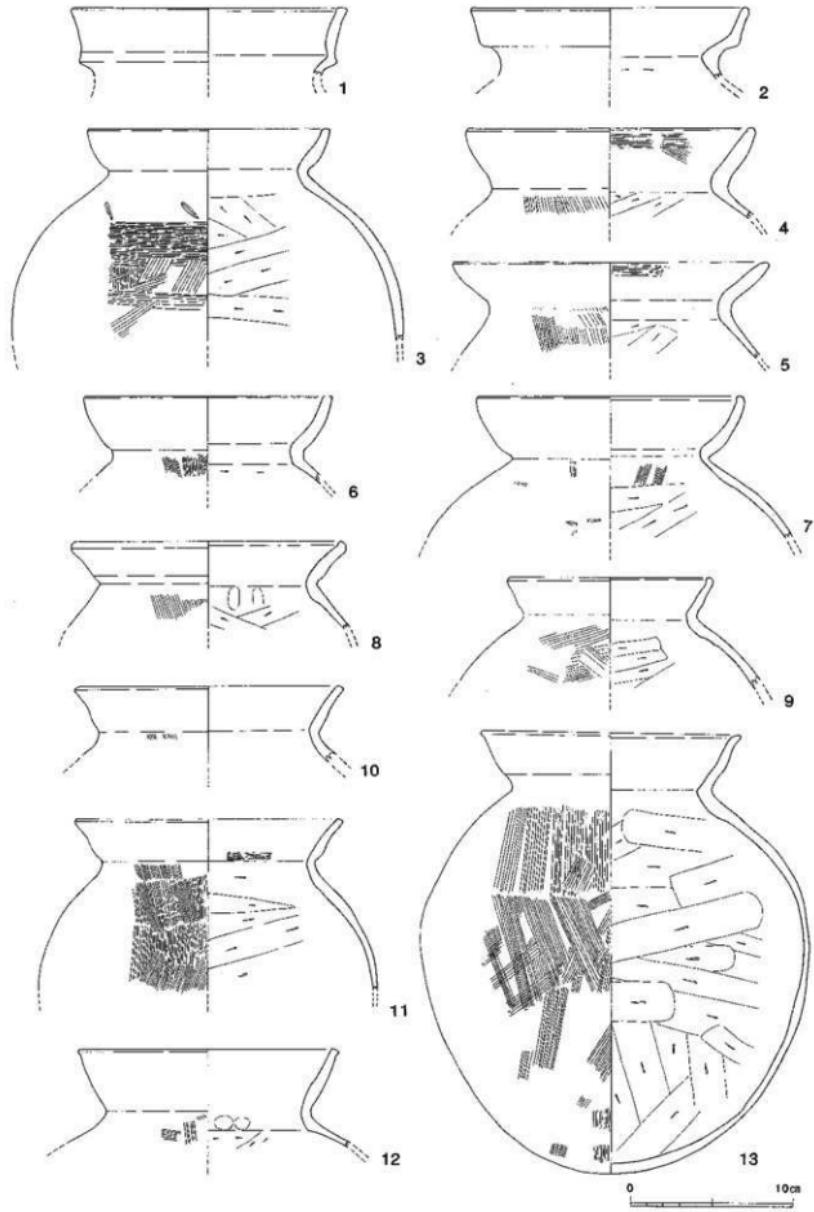
第19図5～8の時期は弥生後期中葉（草田2期）と考えられる。

第19図9～15は底部片である。9～14は平底をなし、若干くびれて立ち上がる。内面はタテミガキ、内面はケズリが施してある。9～11・14は焼成が堅緻で、色調は灰黄褐色をなす。12・13は大きく開き、焼成は良好で、色調はにぶい橙色をなす。15はやや上底をなし、くびれて立ち上がる。全面に磨滅が著しい。第19図9～15は弥生中期後葉～後期前半のものと考えられる。

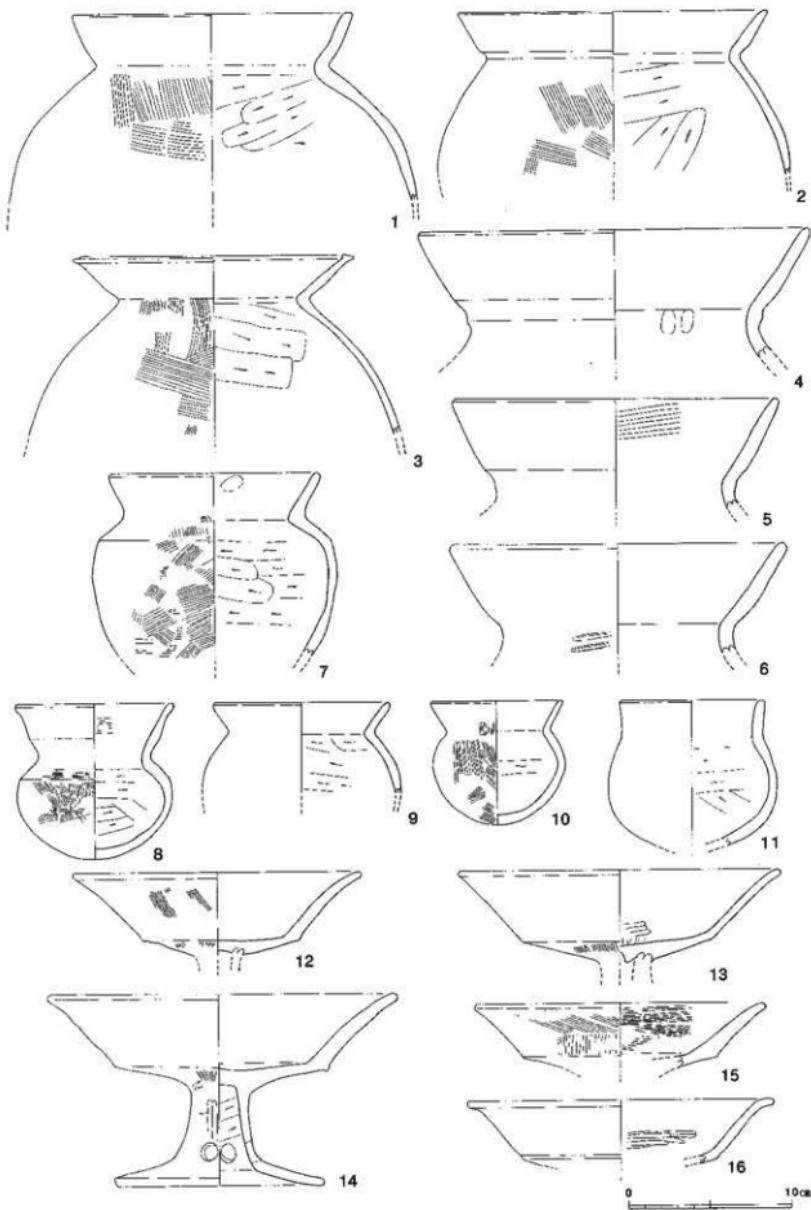
古墳時代の土師器（第20図1～第22図7） 第20図1・2は複合口縁をなす甕の口縁部片である。1は口径約17cmを測り、2次口縁部は外反気味に直立する。口縁端部は面をなし器壁は厚い。焼成は堅緻で、全面に丁寧なナデが施してある。1の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。2は口径約17cmを測り、2次口縁部は短く外傾し、端部は丸くおさめられ、全体的に稜線は甘い。全面に磨滅が著しいが、胴部内面にケズリが施してある。焼成は軟質である。2の時期は古墳時代前期後半（松山Ⅱ期）と考えられる。

第20図3～第21図6は単純口縁をなす甕で、器壁はどれも厚い。第20図3～9は口縁部が内湾気味に開くものである。焼成が堅緻で、胎土には2mm程度の長石・石英を含む。色調は灰黄色をなす。3は口径約14.8cmを測り、口縁端部は内面に肥厚する。胴部上半にはハケメ工具の小口による列点文が間隔をあけて施されている。その下には細かいヨコハケメが途切れながら施されている。外面胴部は細かいハケメ、内面胴部はケズリを施してある。4は口径約17.6cm、5は19.4cmを測る。4・5とも口縁端部は内面に肥厚する。外面胴部にはタテハケメ、内面口縁部にはヨコハケメ、胴部にはケズリが施してある。6は口径約15.2cmを測り、口縁端部は内面に肥厚する。口縁部の長さは3.9cmと長い。外面胴部にはタテハケメ、内面胴部にはケズリが施してある。7は口径約16.2cmを測り、口縁端部は内面に肥厚する。口縁部の長さは4.3cmと長く、器壁も厚い。外面胴部には細かいタテハケメがナデ消され、内面口縁部には胴部にはハケメ後ケズリが施してある。8は口径約16.3cmを測り、口縁端部は内面に肥厚する。口縁の長さは2.6cmと短い。外面胴部はタテハケメ、内面胴部にはケズリが施してあり、指頭圧痕が残る。9は口径約12.2cmを測り、口縁端部は内面に肥厚する。口縁部の長さは2.3cmと短い。外面胴部には粗いハケメ、内面胴部にはケズリが施してある。第21図1も口縁部が内湾して開くものである。口径約17.2cmを測り、口縁端部は若干外方に引き出されている。器壁は厚い。外面胴部には粗いタテハケメ、内面胴部はケズリを施してある。焼成は良好で色調は灰白色をなす。3以外の4～9・第21図1は雑な作りで器壁は厚いが、3だけは丁寧な作りで、外面胴部上半にヨコハケメや列点文などの古い特徴をもつ。

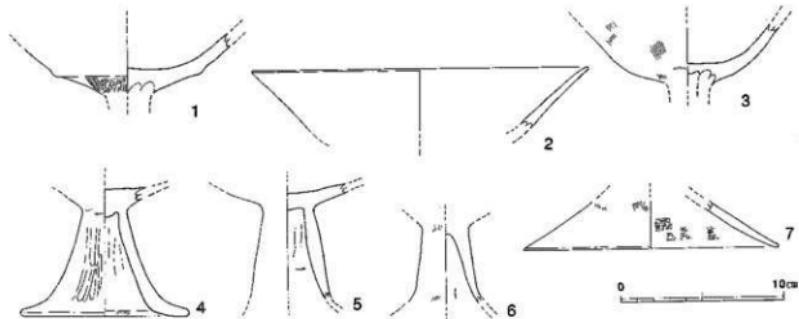
第20図10～13第21図2・3は口縁部が直線的に開くものである。焼成は堅緻で、胎土には2mm程度の長石・石英を含む。色調は灰黄色をなす。10は口径約15.9cmを測り、口縁端部は面をなす。口縁部の長さは2.7cmと短い。口縁部外面は強くナデられ中央がくぼんでいる。内外面はナデが施されている。11は口径約16cmを測り、口縁端部は面をなす。口縁部の長さは2.7cmと短い。口縁部外面は強くナデられ中央がくぼんでいる。外面口縁部はハケメ後ナデ、内面口縁部はハケメ後ナデ、胴部にはケズリが施してある。12は口径約15.4cmを測り、口縁端部は外方に肥厚する。口縁部の長さは4cmと長い。外面胴部にはハケメ後ナデ、内面胴部にはケズリが施してあり、指頭圧痕が残る。13は一部口縁部と胴部を欠くが完形に近いものである。口径約15.8cm、器高27.3cmを測る。口縁部は直線的に開くが、口縁部は強いなでにより、外面の中ほどが膨らみ、内面はくぼむ。口縁端部は外方に引き出されている。胴部は球形に近く、底部は丸底をなす。外面口縁部はナデ、胴部はタテハケ・ナメハケが施され、底部はナデ消されている。内面は口縁部がナデ、胴部はケズリが施してある。第21図2は口径約19cmを測り、口縁端部は若干外方に肥厚する。口縁部の長さは3cmである。外面胴部には粗いハケメ、内面胴部にはケズリが施してある。胎土には橙色の粒が多く混ざっている。焼成は軟質で、色調はに



第20図 1区 5層 出土遺物実測図



第21図 1区 5層 出土遺物実測図 (5)



第22図 1区 5層 出土遺物実測図 (6)

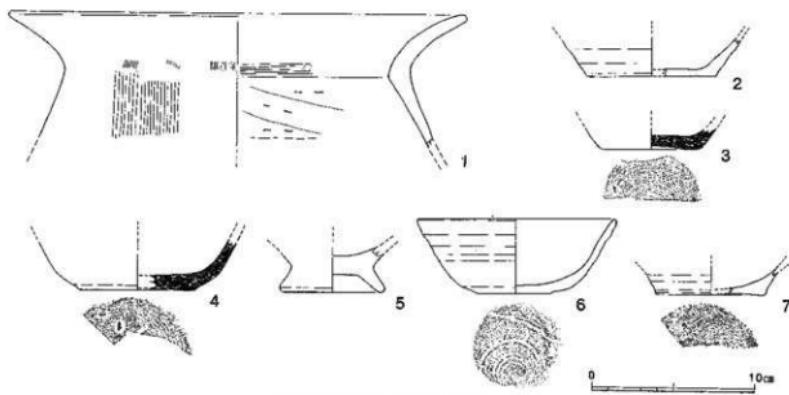
ぶい黄橙色をなす。3は口径約17.3cmを測る。口縁部は直線的に開くが、口縁部は強いナデにより、外面の中ほどが膨らみ、内面はくぼむ。口縁端部は内外に肥厚している。外面胴部は粗いタテハケメ、内面胴部はケズリが施してある。

第21図4～6は大形壺の口縁部から屈曲部にかけての破片である。口縁部は若干内湾気味に長く開き、屈曲部は緩やかで稜線は鋭くない。焼成は良好で、胎土には長石・石英を含む。色調は灰黄色をなす。4は口径約24cmを測り、口縁端部は先細りする。口縁部の長さは6cmと長い。屈曲部外面は強くナデた痕跡があり、内外面にナデが施されている。5は口径約20cmを測り、口縁端部は丸くおさめられている。口縁部の長さは6cmと長い。口縁部外面はナデ、内面はハケメ後ナデ消しを施してある。6は口径約20.6cm、口縁部の長さ5.9cmを測る。5と6は特徴が同じであり、同一個体と考えられる。

第20図3～第21図6の時期は古墳時代前期後半（松山Ⅱ期）～古墳時代中期前半（松山Ⅲ期）のものと考えられる。

第21図7～11は小形壺で口縁部～胴部にかけての破片である。7は口径約13cm、残高11.4cmを測り、他のものよりは大きい。口縁部は短く外傾し、端部は丸くおさめられている。頸部外面はなだらかであるが、内面は鋭く屈曲する。胴部形態は肩が張る。整形は難で、指頭圧痕が残る。外面胴部は粗いハケメ、内面胴部はケズリが施してある。8は複合口縁のなごりをわずかに残すもので、口縁部中ほどが膨らんでいる。口径約9.5cm、器高9.6cmを測る。胴部は、胴部上半で肩が張り、底部は丸底をなす。外面は上半にヨコハケメが一周し、その下はタテハケメが、胴部内面はケズリが施してある。9は口縁部が直線的に短く開き、口径約10.8cmを測る。胴部は張っていない。胴部外面は磨滅気味であるが、ヨコハケメが確認でき、内面はケズリが施してある。10は一部口縁部が欠けているがほぼ完形に近い。口縁部は短く外傾し、口径約8cm、器高7.6cmを測る。胴部は球形をなし、底部は丸底である。胴部外面はタテハケメ、内面にはケズリが施してある。11は口縁部が短く直立し、端部は丸くおさめてある。口径約9cmを測る。外面はハケメ後ナデ消しが、内面胴部は粗いケズリが施してある。7以外の8～11は焼成が良好で、作りも丁寧である。

第21図7の時期は古墳中期前半（松山Ⅲ期）、8～11は古墳前期後半（松山Ⅱ期）と考えられる。



第23図1区5層出土遺物実測図(7)

第21図12～第22図7は高坏で、胎上は精製されるが、赤色粒を含む。坏部と脚部の接合は別作りが多い。第21図12～第22図1は坏部片で口縁部と坏部の境に段がある。第21図12は口径約21.4cmを測り、段は不明瞭である。外面はハケメ後、赤色顔料が施してある。内面は磨滅している。13は口径約19.8cmを測り、段は不明瞭である。外面はハケメ、内面はハケメ後ミガキ、ナデを施してある。14はほぼ完形で口径21.2cm、器高11.8cmを測り、段は明瞭であるが雑な作りである。脚柱部には3方向から円孔が穿たれてある。外面は口縁部ナデ、坏部ハケメ、脚柱部ハケメ後ミガキ、脚裾部ハケメ、内面は口縁部ナデ、坏部ハケメ後ナデ、脚柱部ケズリ、脚裾部ハケメ後ナデが施してある。15は口径約17.8cmを測り、段は不明瞭である。口縁部外面はタテハケメ、内面はヨコハケメが施してある。16は口径約19cmを測り、口縁端部は外方に引き出されている。段は不明瞭である。外面は磨滅しており、内面はミガキが施してある。第22図1は段が不明瞭で、坏部の形態は塊形をなす。坏部外面はハケメ、内面はナデが施してある。2は高坏の口縁部片で口径約20.6cmを測り、内外面にナデが施してある。3は坏部が塊形をなす。坏部外面はハケメ、内面はナデが施してある。第22図4～7は高坏の脚部片である。4は脚裾部が外方に引き出される。外面はハケメ後ミガキ、内面は脚柱部に絞り痕、裾部にハケメ後ナデが施してある。5・6は全面に磨滅している。7は脚径約15.6cmを測る。内外面ともにハケメ後ナデが施してある。

第21図12～第22図7の時期は古墳時代中期前半(松山Ⅲ期)と考えられる。

**奈良・平安時代の土器**(第23図1～7) 第23図1・2は土師器である。1は斐の口縁部～胴部上半にかけての破片で、口径約28cmを測る。屈曲部外面は緩やかで、内面は鋭く屈曲する。全面に磨滅が著しい。2は塊で底径約8cmを測り、器壁は薄い。内外面に強いナデが施してある。底部には糸切痕は見られない。3・4は須恵器の塊で底部に糸切痕がある。第23図1～4の時期は奈良時代頃(8c頃)と考えられる。

第23図5～7は土師器の塊である。5は高台坏の塊である。6は口径約12cm、器高4.6cmを測る。7は底径約6.7cmを測る。第23図5～7の時期は平安時代(10～11世紀頃)と考えられる。

## II. 2区の調査

2区では1区のような土器溜りや遺構は検出していないが、1区と同様4層と5層から遺物が出土している。遺物は多く出土しているが小破片で、4層では21点、5層では93点を図化している。

### 2区 4層出土遺物（第24・25図）

**弥生土器**（第24図1～9） 第24図1・2は底部片で、胎土に長石・石英を多く含む。1は底径約11.6cmを測り、若干くびれて立ち上がる。内外面ともハケメが施してある。2は底径約10.2cmを測り、大きくくびれて立ち上がる。外面はハケメ、内面にはナデが施してある。

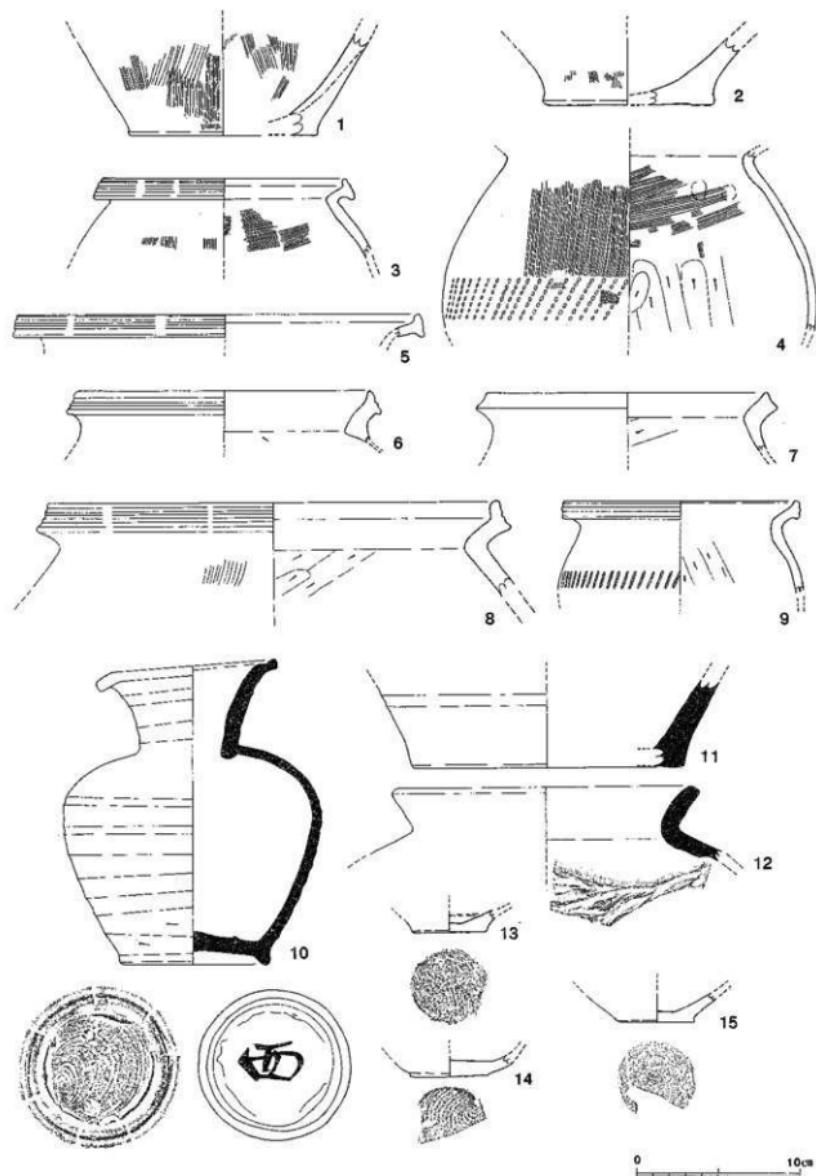
第24図1・2の時期は弥生前期頃と考えられる。

第24図3～9は屈曲部が「く」字状をなす甕の口縁部～胴部上半にかけての破片である。3は口径約15cmを測り、口縁部は短く屈曲する。口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線文が施してある。胴部外面はハケメ後ナデ、内面はハケメが施してある。4は胴部片で、外面胴部上半はタテハケメ、中位には櫛状工具による列点文が施される。内面は胴部下半がケズリ、上半はハケメが施され、指頭圧痕が残る。5は口径約24.5cmを測るやや大きい甕であるが器壁は薄い。口縁端部は上下に拡張され、3条の凹線文が施してある。3～5は焼成が良好で、胎土も精製され、色調は灰白色をなす。6は口径約18cmを測り、口縁端部は上下に拡張され、2条の凹線文が施してある。胴部内面はケズリが施してある。7は口径約17.2cmを測り、口縁端部は強くナデられ上下に肥厚し、瀬部はくぼむ。胴部内面はケズリが施してある。8は口径27.5cmと大きく器壁も厚い大形品である。口縁端部は上方に拡張され、3条の凹線文が施してある。胴部内面にはケズリが施してある。9は口径14.4cmを測り、小形の甕あるいは鉢と考えられる。口縁端部は上方に直立て拡張され、2条の凹線文が施してある。胴部外面中位にはハケメ工具の小口により列点文が施してある。胴部内面には粗いケズリが施してある。

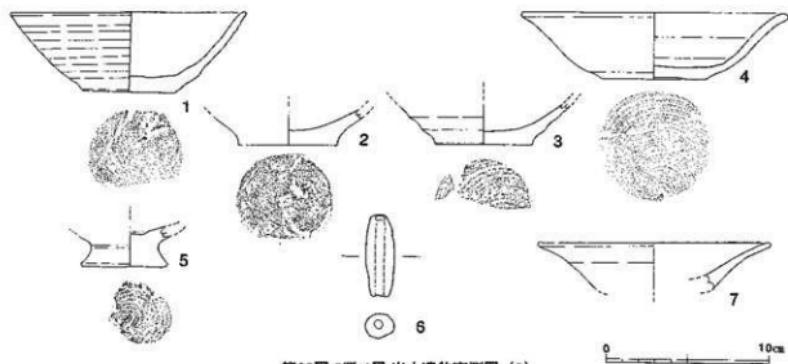
第24図3～5は弥生中期後葉（松本IV—2）、6～9は弥生後期初頭（草田1期）と考えられる。

**平安時代の土器**（第24図10～25図6） 第24図10～12は須恵器である。10は蓋で胴部の一部を欠き、口径11.2cm、器高18.4cmを測る。口縁部はラッパ状に開き、口縁端部は面をなす。内面には沈線が1条巡る。胴部上半で肩部が強く張り、底部は高台を付けている。内外面に丁寧なナデを施してあり、外面胴部下半にケズリを施している。底部には糸切痕があり、墨書きで「西」と記してある。焼成は良好である。10の時期は9世紀頃と考えられる。11は底部片で16.4cmを測り、器壁は1.2cmと厚い。焼成は軟質である。12は甕の口縁部片で口径約18.8cmを測り、口縁部は短く外反し、口縁端部は面をなす。外面は自然釉が付着し、内面胴部は青海波文が施してある。

第24図13～25図4・7は土師器の塊で、底部には糸切痕がある。第24図13は底径4.4cmを測る。外面は磨滅している。14は底径4.8cm、15は底径4.6cmを測る。14・15ともに底部から明瞭にくびれて立ち上がるところと曖昧に立ち上がるところがある。第25図1は口径26.2cmを測り、底径5.6cm、器高4.8cmを測る。外面にはナデの跡を残すが、全面に磨滅している。2・3は底部が大きくくびれて立ち上がる。4は口径16.2cm、底径6.2cm、器高4cmを測り、口縁端部は外方に引き出され、底部は明確で、やや上底をなす。7は口径約14.2cmと大きく開く。5は柱状高台の高台部である。6は棒状土錘である。第24図13～25図7の時期は平安時代後半（12世紀頃）と考えられる。



第24図 2区 4層 出土遺物実測図 (1)



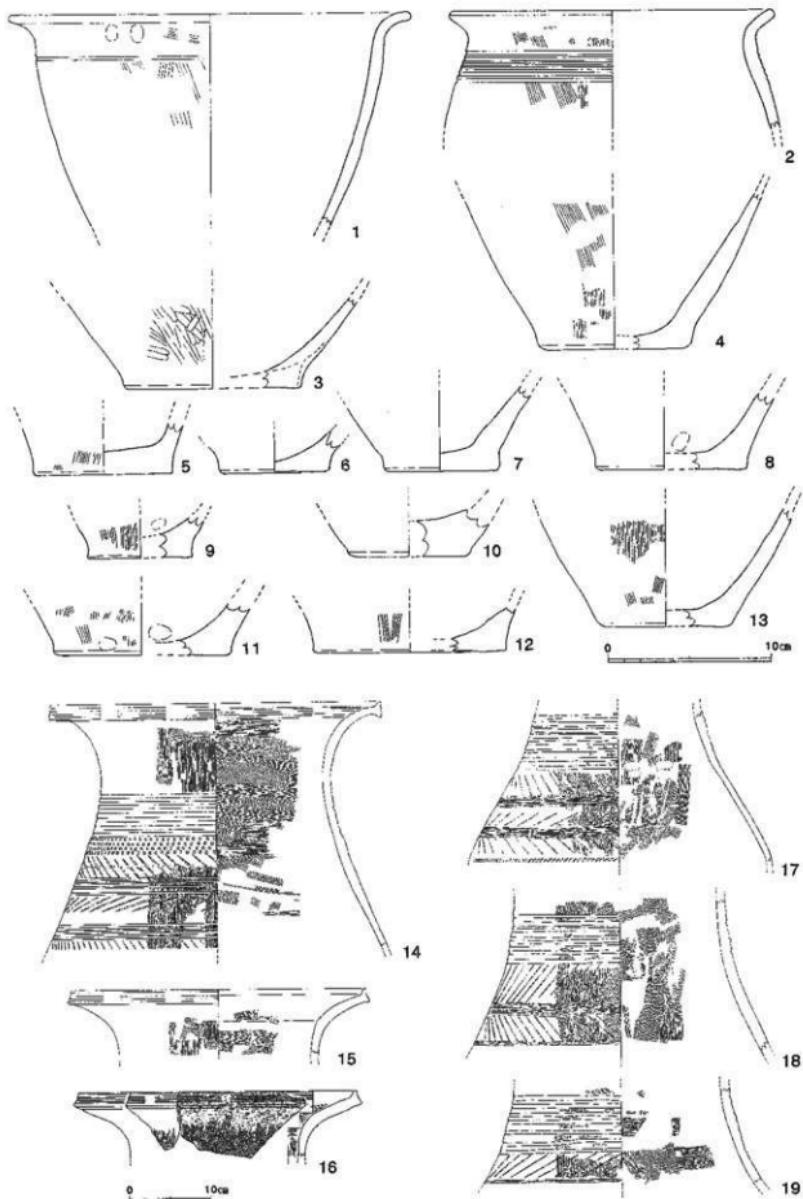
第25図 2区4層出土遺物実測図(2)

#### 2区5層出土遺物(第26図1～第30図34)

**弥生土器**(第26図1～第29図11) 第26図1・2は如意形口縁をなす甕の口縁部～胴部にかけての破片である。1は口径約24.4cmを測り、口縁下に1条の沈線文が巡り、胴部は張らずに底部に向かう。口縁部外面には指頭圧痕が残り、長石・石英を多く含む。1の時期は弥生時代前期(松本T-2)と考えられる。2は口径約20cmを測る。口縁下に6条の沈線文が巡り、胴が張る。口縁部外面はハケメや指頭圧痕が残り、内面にはナデが施されてある。胎土は1のように長石・石英を含まない。2の時期は弥生前中期～中期初頭と考えられる。

第26図3～13は底部片で、胎土に長石・石英を多く含む。3は壺の底部で、底径約10.5cmを測り、大きくくびれて立ち上がる。外面はミガキ、内面はナデである。焼成は堅綴である。4～13は若干くびれて立ち上がる。4は底径8.6cmを測り、全面に磨滅しているが外面はハケメが施してある。5は8.4cmを測り、底は1.4cmと厚く重みがある。外面はハケメである。6は底径約6.6cmを測り、全体に磨滅している。胎土に赤色粒を含む。7は底径6.6cmを測り、器壁が1.1cmと厚い。全体に磨滅している。8は底径9cmを測り、内面に指頭圧痕が残る。全体に磨滅している。9は底径6.4cmと小さい。外面にハケメ、内面に指頭圧痕が残る。10は底径約7cmを測り、底は2.1cmと厚い。11は底径10.5cmを測り、外面にハケメ、内面はナデが施してあり、内外に指頭圧痕が残る。12は底径11.8cmを測り、内面は欠損している。外面にハケメが施してある。13は底径7.6cmを測り、外面にハケメ、内面にナデが施してある。第26図3～13の時期は弥生時代前期頃と考えられる。

第26図14～19は大形の広口壺の破片で縮尺1/6で掲載した。14～16は口縁部～胴部にかけての破片である。14は口径約40cmを測り、口縁部は頸部から緩やかに外反し、口縁端部は上下に拡張され、3条の凹線文が施してある。外面の頸部から胴部にかけては派手な文様で飾っている。上から6条の凹線文、櫛状工具による列点文、3条の沈線を軸として上下にヘラによる羽状文、4条の沈線下にヘラによる羽状文が施してある。口縁部内面にも5条の凹線文が施してある。調整は外面がタテハケメ、内面はヨコハケメを施してある。焼成は良好で、胎土は精製されていて、色調は浅黄色をなす。17～19は14と同じような広口壺の頸部～胴部にかけての破片で、色調や胎土は同じであるが、外面の文様構



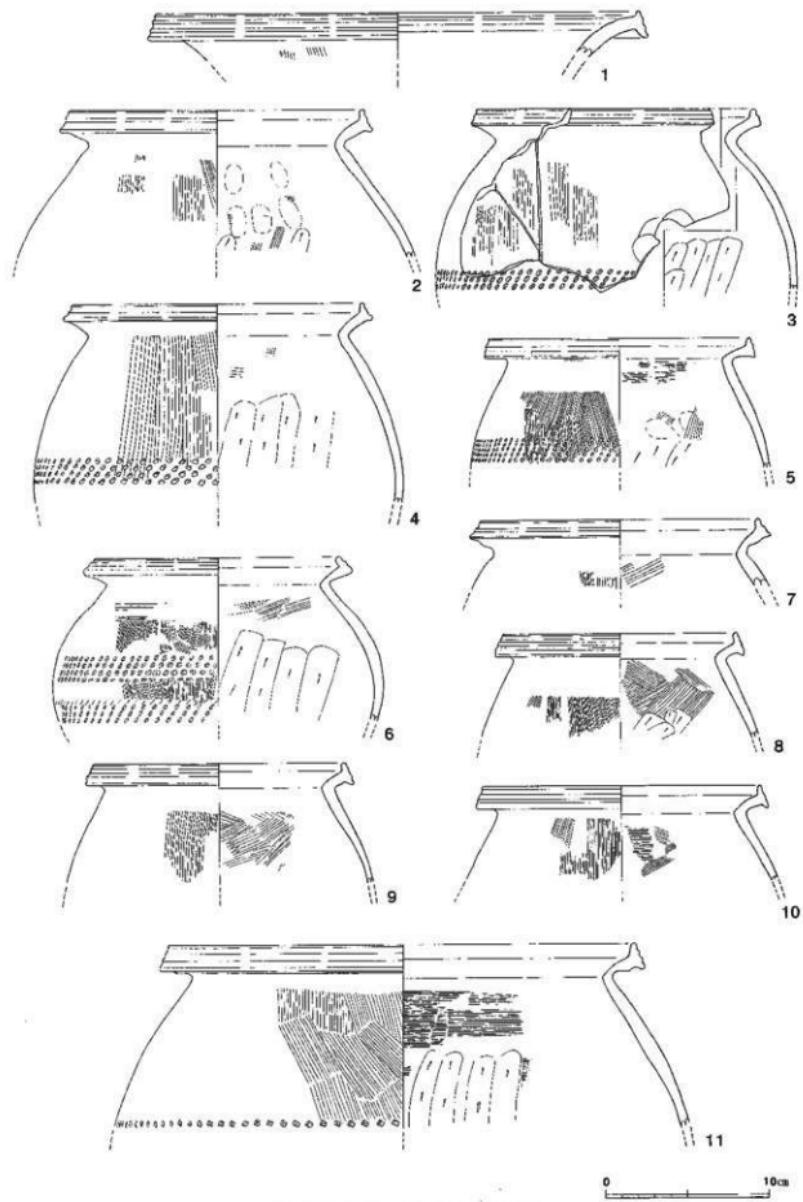
第26図 5層 出土遺物実測図 (1)

成が少しずつ異なっている。15は円筒状の頸部から口縁部が大きく聞くもので、内面の口縁部と頸部の境に稜線に入る。口径約36cmを測り、口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線文が施してある。口縁部は内外面ともにナデ、頸部は外面がタテハケメ、内面がヨコハケメを施してある。16は15と同じ器形をなすが、内面に稜線はない。口径約34cmを測り、口縁端部は上方に拡張し、3条の凹線文を施してある。この土器は2点の破片を接合して図化しているが、焼成環境が違うため、外面の色調、接合面（断面）色調が異なっている。16・15の胎土は14と同じである。第27図1も広口壺の破片であるが、第26図14～19よりは小ぶりで口径約29.8cmを測る。口縁部は大きく開き、口縁端部は上下に拡張され、3条の凹線文が施してある。内面にも浅い凹線文が3条施してある。外面はハケメ、内面はナデが施されている。焼成は堅緻で胎土は精製されている。

第26図14～第27図1の時期は弥生中期後葉（松本IV-2）と考えられる。

第27図2～11は屈曲部が「く」字状をなす壺の口縁部～胴部上半にかけての破片で、胴部内面のケズリは屈曲部まで至っていないものである。2～10の色調は浅黄色をなし、器壁は薄い。2は口径約18cmを測り、口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線文が施してある。胴部外面はタテハケメ、内面はハケメ後ナデを施しており、指頭圧痕が多く残る。焼成は堅緻で、胎土は精製されている。3は口径約16cmを測り、口縁端部は上下に拡張し、2条の凹線文が施してある。外面胴部中位には櫛状工具による列点文が施してある。外面は胴部上半にタテハケメ、内面は胴部上半にハケメ後ナデ、胴部中位にケズリが施してある。外面胴部中位には土器焼成の際に、器面が3回に分けて破裂した状況が確認できる。焼成は良好である。4は口径約18cmを測り、口縁端部は上下に拡張し、2条の凹線文が施してある。外面胴部中位には櫛状工具による列点文が施してある。外面は胴部上半にタテハケメ、内面は胴部上半にハケメ後ナデ、胴部中位にケズリが施してある。焼成は堅緻である。5は口径約16.2cmを測り、口縁端部は上下に拡張し、3条の浅い凹線文が施してある。胴は張らない。外面胴部中位には櫛状工具による列点文が施してある。外面は胴部上半にタテハケメ、内面は胴部上半にハケメ後ナデ、胴部中位にケズリが施してある。焼成は堅緻である。6は口径約15cmを測り、口縁端部は上方に拡張し、2条の凹線文が施してある。胴部は球状になり、鉢の可能性が高い。外面胴部中位には櫛状工具による列点文が2段施してある。外面は胴部上半にタテハケメ、内面は胴部上半にハケメ後ナデ、胴部中位にケズリが施してある。7は口径約17.2cmを測り、口縁端部は上下に拡張し、2条の凹線文が施してある。胴部外面にタテハケメ、内面にはハケメ後ナデが施してある。8は口径約14.6cmを測り、口縁端部は上下に拡張し、4条の凹線文が施してある。胴部外面にタテハケメ、内面胴部上半にハケメ、胴部中位にケズリが施してある。9は口径約15.5cmを測り、口縁端部は上下に拡張し、4条の凹線文が施してある。胴部外面にタテハケメ、内面にナナメのハケメが施してある。10は口径約17.2cmを測り、口縁端部は上下に拡張し、2条の浅い凹線文が施してある。胴部外面にタテハケメ、内面にナナメのハケメが施してある。11は大形の壺である。口径約28.6cmを測り、口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線文が施してある。器壁は1cmと厚い。胴部外面中位には櫛状工具による列点文が施してある。胴部上半はナナメのハケメ、内面胴部上半にヨコハケメ、胴部中位にケズリが施してある。焼成は良好で、色調は灰黄褐色をなす。

第27図2～11の時期は弥生中期後葉（松本IV-2）と考えられる。



第27図 2区5層 出土遺物実測図 (2)

第28図1は壺の口縁部～頸部にかけての破片である。頸部が内傾して口縁部で短く外反する。口径11.8cmを測り、口線上端がつまみ上げられ、1条の凹線文が施してある。外面はハケメ、内面口縁部はナデ、頸部はケズリが施してある。全体が磨滅しており、色調は浅黄色をなす。

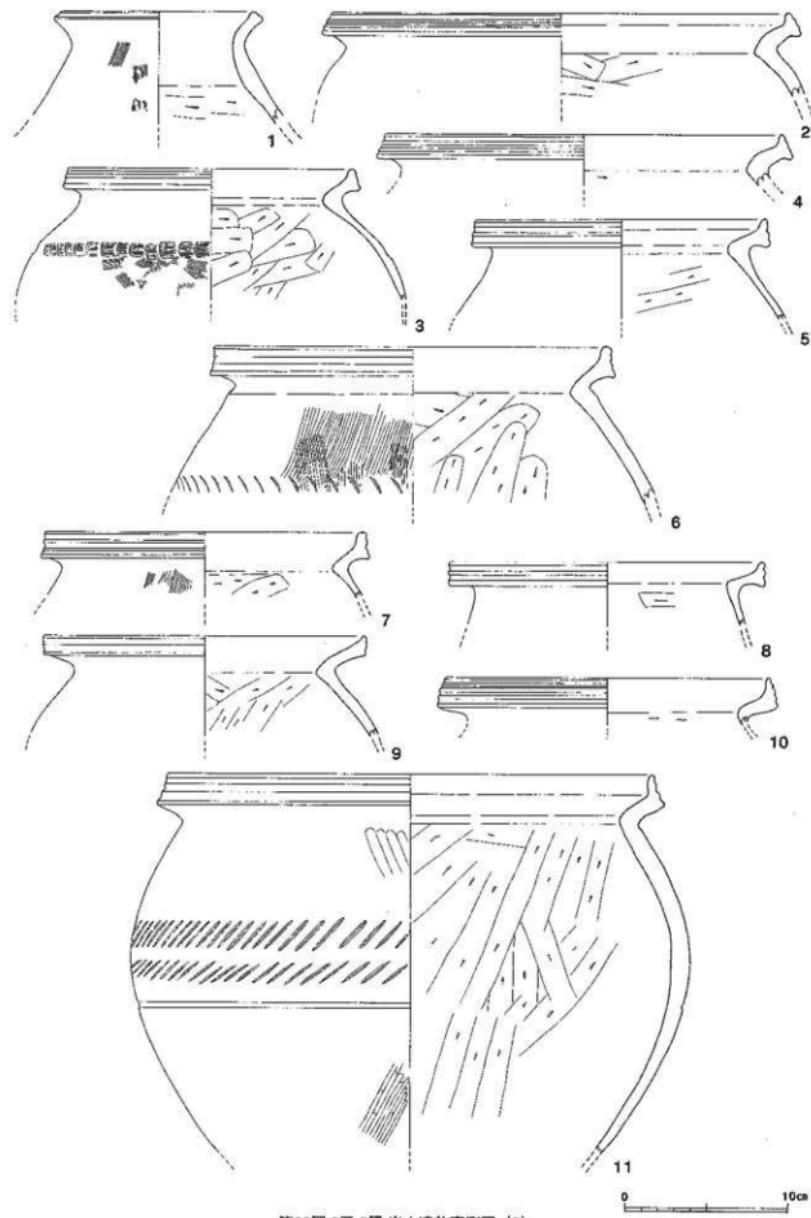
1の時期は弥生後期初頭（草田1期）と考えられる。

第28図2～第29図2は屈曲部が「く」字状をなす壺の口縁部から胴部にかけての破片である。胴部内面のケズリが屈曲部まで及ぶものである。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色をなす。胎土には2mm程度の長石・石英を含む。第28図2は口径約28cmを測る大形のもので、器壁は1cmと厚い。口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線文が施してある。胴部外面はナデ、内面はケズリが施してある。3は口径約17.5cmを測り、口縁端部は上下に拡張し、2条の凹線文が施してある。胴部上半に貝殻腹縁による押し引き状の文様が施してある。外面胴部上半はナデ、文様下はハケメ、内面はケズリが施してある。口縁部には煤が付着している。4は口径約24.4cmを測り、口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線文が施してある。胴部外面はナデ、内面はケズリが施してある。焼成は堅緻である。5は口径約18cmを測り、口縁端部は直立気味に上下に拡張し、3条の凹線文が施してある。胴部外面はナデ、内面はケズリが施してある。5は口径約24cmを測り、器壁は厚い。口縁端部は直立気味に上下に拡張する。上方の拡張が大きく3条の浅い凹線文が施してある。外面胴部中位には接地面が曲がった工具などにより列点文が施してある。胴部外面はタテハケメ、内面はケズリが施してある。7は口径約19.8cmを測り、口縁端部は直立気味に上下に拡張する。上方の拡張が大きく3条の凹線文が施してある。胴部外面はタテハケメ、内面はケズリが施してある。8は口径約19.4cmを測り、口縁端部は直立気味に上下に拡張し、2条の凹線文が施してある。胴部は張らない。全体に磨滅しているが胴部外面はタテハケメ、内面はケズリが施してある。9は口径約19.6cmを測り、口縁端部は直立気味に上方の拡張し、2条の浅い凹線文が施してある。全体に磨滅しているが胴部外面はナデ、内面はケズリが施してある。10は口径約20cmを測り、口縁端部は直立気味に上方に拡張し、4条の凹線文が施してある。胴部内面はケズリが施してある。11は口径約29.8cmを測る大形のもので、胴部上半の器壁は厚い。口縁端部は外反気味に上方に拡張し、3条の凹線文が施してある。外面胴部中位にはヘラ状工具による羽状文が2段施され、その下に1条の沈線が巡る。外面胴部上半はナデ、下半はミガキ、内面胴部はケズリが施してある。第29図1は口径約19cmを測り、口縁端部は直立して上下に拡張し、3条の浅い凹線文が施してある。屈曲部は「く」字状よりは「C」字状に近い。胴部外面はナデ、内面はケズリが施してある。口縁部外面に煤が付着している。2は口径約18cmを測り、口縁端部は外傾気味に上下に拡張する。上方の拡張が大きく4条の凹線文が施してある。屈曲部は緩やかで鋭い稜線は入らない。胴部外面はナデ、内面はケズリが施してある。

第28図2～第29図2の時期は弥生後期初頭（草田1期）と考えられる。

第29図3は高坏あるいは鉢の口縁部片で、口径約25.2cmを測り、坏部は屈曲する。口縁端部は左右に肥厚し、3条の凹線文を施してある。外面口縁部はナデ、坏部はミガキ、内面はナデが施してある。焼成は良好で、胎土は砂粒を含む。色調は灰黄色をなす。この土器は吉備系の影響を受けた土器と考えられ、出雲市小山遺跡第2次調査SD01でも同様の高坏が出土している。

第29図3の時期は弥生後期初頭（草田1期）と考えられる。



第28図 2区 5層 出土遺物実測図 (3)

第29図4～10は底部片である。4～7は若干くびれて立ち上がる。4は底径約5.8cmを測り、胴部の器壁は3mmと薄い。外面は丁寧なタテミガキ、内面はケズリが施してある。焼成は堅綴で、胎土には砂粒を含む。5は底径6.8cmを測る。外面は丁寧なタテミガキ、内面はナデが施してある。焼成は堅綴で、胎土には砂粒を含む。外面には光沢のある黒斑が確認できる。6は底径約4.6cmを測る小形のものである。胴部の器壁は3mmと薄い。外面は丁寧なタテミガキ、内面はケズリが施してある。焼成は堅綴で、胎土には砂粒を含む。7は底径約5.8cmを測り、大きくくびれて立ち上がる。底の厚さは1.6cmと厚い。前述した4～6とは違い雑な作りである。外面は粗いタテハケメ、内面はケズリが施してある。胎土は2mm程度の長石・石英を多く含む。8～10はくびれず、底部から直線的に開く。8は底径約5.2cmを測る。外面はタテハケメ、内面はケズリが施してある。胎土は2mm程度の長石・石英を多く含む。9は底径約5.2cmを測る。外面は細かいタテハケメ、内面はケズリが施してある。焼成は良好で、胎土には砂粒を含む。10は底径約8.2cmを測る。全体に磨滅しているが内面はケズリが施してある。焼成は軟質で、胎土には1mm程度の長石・石英を多く含む。

11は底部片を転用したものと考えられる。底部の立ち上がり部を何かで削り、形を変形させたものである。底部外面はナデ、内面はケズリが施してある。焼成は良好で胎土には長石・石英を含んでいる。第29図4～11は弥生後期初頭（草田1期）と考えられる。

**弥生石器**（第29図12～14） 第29図12～14は石器である。12は石鎌で、全長11.4cm、幅5.6cm、厚さ2.2cmを測る小形のものである。平面形は撥形をなし、基部は尖る。横断面形は平行四辺形状をなす。刃部は打翼により薄く剥ぎ取られ、刃縁に2次加工の跡がある。出雲平野の弥生の石鎌は前期の出土例が多く、中期・後期の例はない。よって、12の時期は弥生前期頃と考えられる。

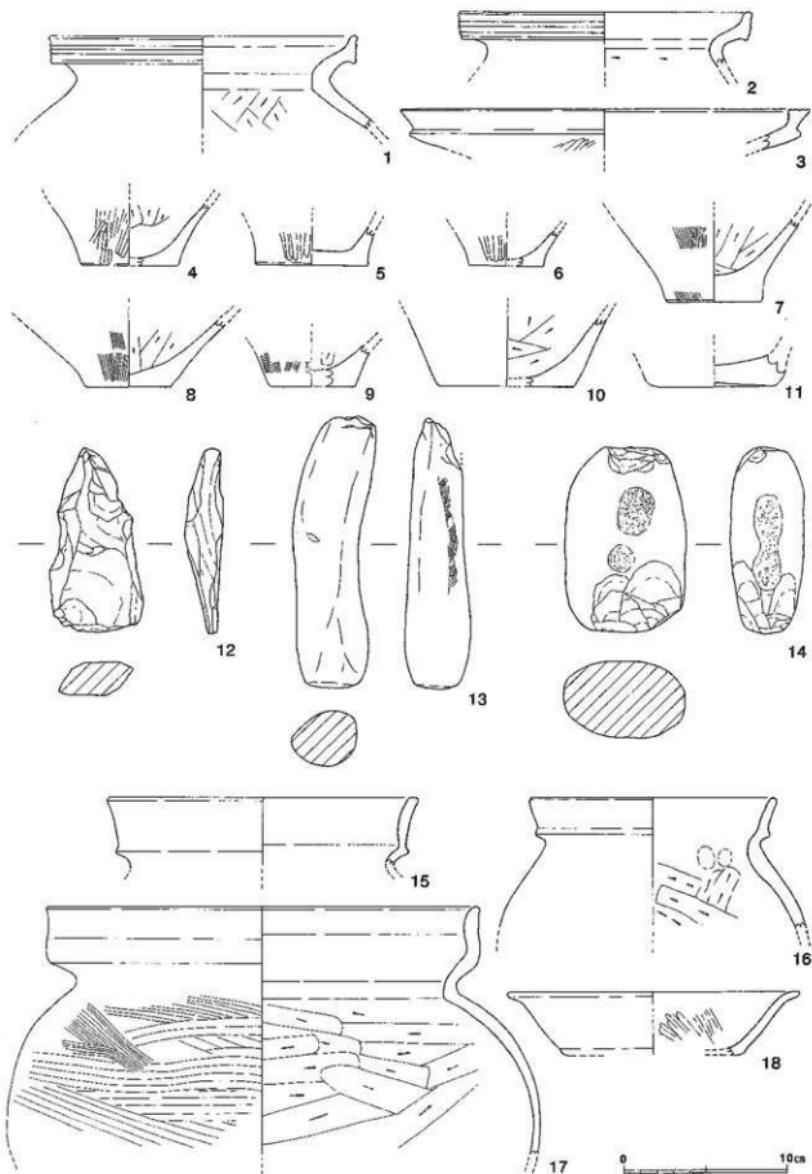
13は棒状の磨石で、全長16.8cm、幅4.4cmを測る。平面形は長方形を基本とするが、体部中央は握り部を作り出すために、くぼみを作っている。横断面形は、磨り面は円形に近いが、体部は隅丸の台形状をなす。体部は粗く磨きが施してある。石材は砂岩と考えられる。

14は叩き石と考えられる。全長11.4cm、幅7.6cm、厚さ4.6cmを測る。両端部は割れ面をなしているが、使用の結果、磨耗している。両主面中央、両側面中央に敲打痕による窪みが2箇所づつみられる。13・14の詳細な時期は不明であるが、弥生時代の所産と考えられる。

**古墳時代の土師器**（第29図15～18） 第29図15～17は複合口縁をなす甕の口縁部～胴部上半にかけての破片である。15は口径18.8cmを測り、2次口縁部は外反して立ち上がる。口縁端部は面をなし器壁は厚い。焼成は堅綴で、全面にナデが施してある。時期は古墳時代前期初頭と考えられる。16は複合口縁がかなり退化したもので、口径約15cmを測り、2次口縁部は短い。内面の1次口縁と2次口縁の境のくぼみは浅い。焼成は軟質で、全体に磨滅している。胴部内面はケズリが施してある。17も複合口縁が退化気味で口径約26.4cmの大形で、器壁も厚い。2次口縁部は外反気味に直立し、口縁端部は丸くおさめてある。1次口縁と2次口縁の境は内外面ともに緩やかである。外面胴部上半は粗いヨコハケメ、内面はケズリが施してある。

18は高环の坏部片で、口径約18cmを測り、环部と口縁部の境に不明瞭な段をもつ。口縁端部は外方に引き出されている。全体に磨滅気味であるが、内面にミガキが施してある。

第29図16～18は古墳時代前期後半（松山II期）と考えられる。



第29図 2区 5層 出土遺物実測図 (4)

**奈良時代の土器**（第30図1～7） 第30図1～4は須恵器片である。1は高台が付く底部片で、底径約12cmを測る。外面は丁寧なナデ、内面は青海波文を施してある。高台が付くもので内面に青海波文を残すものは類例がなく、器種ははっきりしないが、器壁が厚いことから、壺の底部片を考えておきたい。2は壺の底部片で丸底をなす。外面は凹凸の激しい雜なナデが、内面は凹凸があるが丁寧なナデが施してある。3は壺の底部片で底径7.8cmを測る。壺壁は薄い。底部には静止糸切痕がある。5～7は土師器の壺である。5は口径約11.8cm、器高4cmを測り、器壁は3mmと薄い。口縁端部は先細り、平底をなす。外面に強いナデにより窪みをもつ。内面は丁寧なナデが施してある。6は底部片で底径約8.4cmを測り、平底をなす。器壁は3mmと薄い。内外面に強いナデが施してある。7は底部片で底径約6cmを測り、上底をなす。5・6よりは器壁は5mmで厚い。外面に強いナデにより窪みをもつ。内面は丁寧なナデが施してある。第30図1～7の時期は8世紀頃と考えられる。

**平安時代の土器**（第30図8～32） 第30図8～32は上師器片で、8～14は高台付壺の底部片で、高台は短く外傾する。8は底径約7.2cmを測り、内湾する体部をもち、高台は薄い作りである。内外面ともに丁寧なナデが施してある。9は底径6.2cmを測る。内外面に丁寧なナデが施されており、高台も厚いしっかりとしたものである。胎土には長石・石英を含み、色調は8と同じ浅黄橙色である。10は底径約6.8cmで、焼成は堅緻である。11は底径約7.4cmで、内面は光沢のある黒斑状をなす。12は底径5.2cmを測る小形のもので、全体に磨滅が著しい。13は底径5.8cmを測る。色調は橙色をなす。14は高台が欠損したものである。

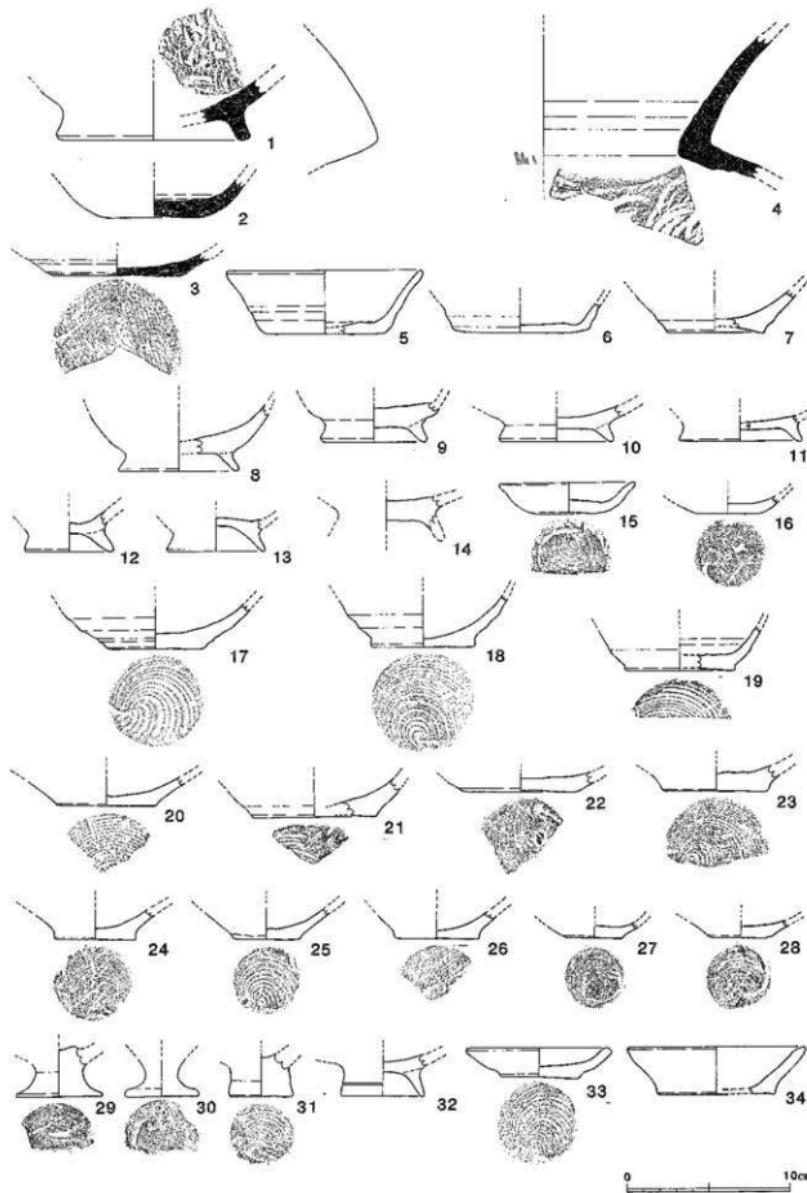
15・16は高台のない壺で、15は口径8.2cm、器高2cmを測る皿状をなし、底部と胴部の境は不明瞭で、底部に糸切痕がある。浅黄橙色をなす。16は底径4cmを測る小型で、底部と体部の境は不明瞭である。底部に糸切痕がある。浅黄橙色をなす。第30図8～16の時期は10世紀頃と考えられる。

第30図17～23は高台のない壺の底部片で糸切痕があり、底部と胴部の境が明瞭なもので、底部が大きい。17～19は体部が内湾して立ち上がり、焼成は堅緻で色調はにぶい黄橙色をなす。17は底径5.6cmを測り、磨滅が著しい。18は底径6.2cmを測る。19は底径6.8cmを測る。20～23の焼成は軟質である。20は底径約6cmで、内面は黒斑のようなものがみられる。21は底径約7.4cmで、全面に磨滅している。22は底径6.6cmを測る。23は底径約6.4cmを測る。

24～28は底径が5cm以下の小さいもので小皿と考えられる。全体に磨滅している。

29～32は台付皿で、29～31の台は柱状高台をなす。29は高台径5.2cmを測り、高台端部を横に引き出している。糸切痕は不明。30は高台径4.4cmを測り、高台端部は横に引き出されている。糸切痕は不明。31は高台径3.8cmを測り、高台は柱状をなし、高台端部はナデによりつまみ出される程度である。糸切痕がある。32は高台径5cmを測り、高台が中空で、細く外傾し、高台端部は先細る。高台外面には沈線が1条巡る。焼成は堅緻で胎土も精製してあり丁寧な作りで、色調は浅黄橙色をなす。第30図17～32の時期は12世紀頃と考えられる。

**戦国時代の土師器**（第30図33～34） 33・34は小皿で、33は口径8.6cm、底径4.6cm、器高1.8cmを測る。体部は内湾して短く立ち上がり、口縁端部は丸い。底部には糸切痕がある。34は口径約10.8cm、底径約7cm、器高3cmを測る。体部は直線的に開き、口縁端部は先細りする。内外面に赤色顔料が施してある。第30図33～34の時期は戦国時代（16世紀頃）と考えられる。



第30図 2区 5層 出土遺物実測図 (5)

## 第5章　まとめ

中野西遺跡は新発見の遺跡で今回の調査の資料によってのみ遺跡の概要がわかる。遺構は少なく、遺物は包含層資料がほとんどであるが、現状までに判明したことをまとめてみたい。

### 遺跡の消長

中野西遺跡の出現は弥生時代前期である。如意形口縁をなす甕で、口縁下に1条の沈線を巡らすものがあり（第26図1）、この土器から当遺跡の出現は松本I-2と考えられる。これに続く前期土器としては、口縁下に沈線を6条巡らすものがある（第26図2）。また、詳細な時期は不明だが、胎土に長石・石英を多く含む底部片が23点出土している。石器としては石臼が出土している。出雲平野において当遺跡のように縄文時代に遺跡がなく弥生時代前期になって出現する遺跡は近年の発掘調査で徐々に増えてきている。これは斐伊川・神戸川の沖積作用が進んだ結果、生活と生産に適した土壤ができ、生活が安定し人口が増加したと結果と考えられる。

これに続く弥生中期前半期の遺物は出土していない。新たに登場するのは当遺跡の中核時期である弥生中期末～後期初頭（松本IV-2～草田1期）であり、多くの土器が出土している。出土量は甕の割合が高く、壺、高環と続く。壺には塩町式土器の影響を受けたものもある（第17図14・15）。この時期に続く草田2期の土器も少量出土している。

出雲平野の大規模集落といわれる下古志遺跡、古志本郷遺跡・小山遺跡などは弥生後期に規模が大きくなり、出土遺物も多い。しかし、当遺跡では後期後半・終末の遺物は出土しておらず、他遺跡とは異なった動向を示している。

古墳時代前期前半の遺物は出土しているものの、その数は少ない。古墳時代前期後半～中期前半にかけて遺物が増大して当遺跡の第2の中核時期となる。出雲平野では古墳前期後半～中期の集落遺跡は三田谷I遺跡で住居跡が見つかっている程度で類例は少ない。ここでは甕、高環、小形壺が遺物の主体をなす。これに続く、中期後半・後期の遺物は出土していない。

奈良時代～平安時代になると再び遺物が増加する。8～12世紀にかけての遺物で、出土数は12世紀の塊が多い。9世紀の須恵器壺の底部に「西」と書かれた墨書きが出土しており、注目される（第24図10）。中世の遺物ではなく、戦国時代（16世紀）の塊が2点出土している。

### 中野美保遺跡との関連（表1・表2）

中野美保遺跡は中野西遺跡の南東約200mに位置し、平成11年度に出雲市教育委員会が調査を行っている。この二つの遺跡の間には遺跡が続いていないことが試掘調査により推定されている。中野美保遺跡は、平成13年に島根県埋文センターも調査を行っており、その成果を基に表を作成した。

中野地区における人々の生活は中野西が松本I-2の頃にはじまり、中野美保は1段階遅れて出現している。両遺跡とも中期後葉～後期初頭の遺物が多く出土し、後期後半～古墳前期初頭は中野美保で多く遺物が出土し、中野西ではほとんど遺物は出土しない。それに代わって、古墳前期後半～中期前半を迎えると中野西が多く、中野美保ではほとんど遺物はみられない。古墳時代中期後半～7世紀は再び中野美保で遺物が多くみられるようになり、中野西では遺物の出土はみられない。8世紀～12

世紀までは両遺跡で遺物が観察される。製塩土器は中野美保ではみられるが、中野西ではみられない。

以上のように、2遺跡の消長関係から弥生後期（草田3期）頃～飛鳥時代（7世紀）頃には中野地区の人々は生活場所を中野西と中野美保を交互に移動していたと考えられる。これは包含層資料からの検討成果であり、遺構の分布の成果ではないため資料の確実性を欠いている。しかし、この資料の変化を積極的に評価するならば、斐伊川の氾濫により地形が大きく変化し、微高地が移動したことにより、人々の生活場所が移動したと想定できる。このように考えるならば、中野西遺跡と中野美保遺跡は一連の遺跡として捉えて考える必要がある。

表1 中野西・中野美保遺跡の消長表(弥生時代)

時期 遺跡名	弥 生 時 代											
	I-2	I-3	I-4～ II-1	II-2	III	IV-1	IV-2	草田1	草田2	草田3	草田4	草田5
中野西	○		○				○	○	○			
中野美保		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○

表2 中野西・中野美保遺跡の消長表(古墳時代～平安時代)

時期 遺跡名	古 墓 時 代				飛鳥時代		平 安 時 代				
	前期前	前期後	中期前	中期後	後期	7c	8c	9c	10c	11c	12c
中野西	○	○	○				○	○	○		○
中野美保	○	○		○	○	○	○	○	○	○	

出雲平野における集落遺跡の展開としては、まず、斐伊川・神戸川の沖積作用により縄文後期～晩期に遺跡が増加していく。その後、弥生前期に遺跡が増化し、さらに弥生中期後半にも増加し、古墳初頭まで大規模集落が営まれている。しかし、その後、大規模集落は解体し、古墳時代の集落遺跡についてはほとんどわかっていない状況である。また、西谷墳墓群の四隅突尖墳形墳丘墓からつながる大規模な前期古墳についても発見されていない。このような出雲平野の遺跡が展開していく過程で、中野西・中野美保遺跡はそれらとは異なる動向を示し、弥生前期～平安時代にかけてほとんどの時期の遺物が出土しており、遺跡が連続して営まれていたことが伺える。このように、弥生時代前期～平安時代にかけて連続して営まれている遺跡の類例は出雲平野では確認されておらず、その点において出雲平野の集落遺跡における中野西・中野美保遺跡の重要性が指摘できる。特に、中野西遺跡では出雲平野で出土例の少なかった古墳時代前期後半～中期にかけての遺物が多く出土しており、大きな成果である。また、近年の発掘調査の増加で古墳時代の集落は徐々に資料が蓄積している。浅柄遺跡、井原遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、長瀬遺跡、荻村Ⅱ遺跡などがある。これらは出雲平野に点在しており、弥生時代のような大規模な集落であったとは考えにくく、また、遺跡群としては捉えにくい状況である。

以上のように、中野西・中野美保遺跡は、出雲平野の集落遺跡の展開を考える際にとても重要な問題を抱えていると考えられる。

## 土器焼成について

当遺跡2区5層より土器焼成に関連する可能性がある遺物が2点出土している。第27図3は胴部外面にクレーター状の剥離をもつ土器である。剥離の平面形は、半径約1cmの半円形をなすものが3つ重なりあった状態をなし、順に剥離していったと考えられる。断面は四レンズ状をなし、剥離の深さは3mm程度である。このような剥離の状況は打撃によるよって起こるものではなく、最近の研究では焼成破裂痕と呼ばれる土器焼成中に器面がはじけ込んだ痕跡と考えられている[田崎2000]。焼成後や発掘作業中に生じた傷ではないということは、破裂面が器面と同じ焼き色をしているということで証明できる。また、煮炊きにより剥離した可能性も考えられるが、器面に炭化物の付着は確認できることから煮炊きによる破裂の可能性は低い。ただ、この破裂痕に合う焼成破裂片はみつかっていない。

第26図16は器面の色調が違う破片が接合している土器である。A破片の外面色調は暗褐色、B破片の外面色調は浅黄色をなす。また、接合面の破面は黒化層の色や範囲が違う。破面の色調はA破面が黄灰色(Hue 2.5Y 6/1)をなし、B破面は灰白色(Hue 5 Y 7/1)をなす。これは焼成時破損土器と呼ばれるものの特徴で、土器焼成中に器体が割れ、破片が散乱し、破片それぞれが違う場所で焼きあがったものである。このように焼成環境の違いにより、2点の破片の色調が異なっていると考えられる。ただ、破面まで黒変部が伸びていないため、焼成時破損土器と断定はできず、可能性が高い上器と考えておきたい。また、当遺跡は低湿地であるため埋没環境の違いにより色調が変わった可能性も考えられるが、これは黒化層の範囲の違いからその可能性は低いと考えられる。これら2点は弥生中期後葉の土器片で、土器焼成に関連する遺物の可能性が高いが、出土数が2点と少なく、また、焼成破裂片がみつかっていないため、当遺跡で土器焼成を行っていたと断定するにはいたらなかった。

出雲平野で土器生産関連遺物が出土している遺跡としては海上遺跡があげられる。海上遺跡では弥生中期後葉の焼成時破損土器やハケメ工具が出土しており、土器生産を行っていた可能性が高い。今後のこのような土器焼成に関連する資料を収集・検討し、出雲平野でどのような単位で弥生上器を生産していたのか、また、在地の土器がどのくらいの範囲で移動しているのかを解明することができるのではないかと考える。

## 「X」印のある弥生後期土器（表紙）

第18図8は弥生後期初頭（草田1期）の壺の頸部に、櫛状工具による「X」印をもつ土器である。絵画というよりは記号として評価できる「X」印は、斐川町神庭荒神谷遺跡の銅剣や加茂町の加茂岩倉遺跡の銅鐸に類例がみられる。これらの青銅器とは施文方法が違うが、「X」に関する概念が弥生後期初頭に出雲平野左岸に存在していたことは注目すべきである。上記の青銅器の時期としては弥生中期後葉、弥生後期前葉の二者があり、年代論にも新たに問題を定義する遺物であると考えられる。

神庭荒神谷や加茂岩倉遺跡の青銅器と当遺跡出土の「X」印をもつ弥生後期初頭の土器との関連はこれから詳細な検討をしていく必要があろう。

## まとめ

中野西遺跡の発掘調査では、遺構の発見は2基と少なく、遺物の大半が包含層より出土している。しかし、出雲平野の歴史を解明する貴重な発見がいくつもあった。まず、中野西・中野美保遺跡を一連の遺跡と考えるならば、弥生前期～平安時代にかけて連続的に遺跡が営まれており、出雲平野では類例のない重要な遺跡であると考えられる。特に中野西遺跡では出土数の少ない古墳時代前期後半～中期前半の完形に近い土器が出土し、今後の集落研究を進めて行く上で重要な資料となるであろう。そして、現状では弥生時代のような遺跡群としてとらえることができない古墳時代集落がどのように出雲平野で展開をしていたのかを考える情報を提供したといえよう。

弥生中期後葉の上器焼成に関連する遺物は、弥生土器の生産についての問題を考える契機となった。また、「×」印をもつ弥生後期初頭の土器は、著名な青銅器と関連する問題を提起した。

このように中野西遺跡の調査は、今後解明して行くべき課題を与えてくれたといえよう。

## 【参考文献】

赤沢秀則編1992「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5南講武草田遺跡」鹿島町教育委員会  
吾郷和宏編1997「加茂岩倉遺跡発掘調査概報」I 加茂町教育委員会

今岡一三、梶田勝造編1999「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V三田谷Ⅰ遺跡」  
(V o 1.1) 島根県教育委員会

宇野隆夫1989「10井戸考」『考古資料にみる古代中世の歴史と社会』真陽社

田崎博之2000「遺跡出土の焼成粘土塊・焼成剝離土器片からみた弥生土器の生産・供給形態」(課題  
番号09610406) - 平成9～11年度科学研究費補助金<基盤研究(c)(2)>研究成果  
報告書-

鳥谷芳雄編2000「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11三山谷Ⅰ遺跡」(V o 1.3)  
島根県教育委員会

藤永照隆編2001「出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 中野美保遺跡・藤ヶ森遺跡・荻原Ⅱ遺跡」  
出雲市教育委員会

藤永照隆編2002「出雲市民病院移転予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書海上遺跡」出雲市教育委員会  
広江耕史1992「島根県における中世土器」「松江考古」第8号 松江考古学談話会

松本岩雄1992「出雲・隱岐地域」「弥生土器の様式と編年」目耳社

松本岩雄・足立克巳編1996「出雲神庭荒神谷遺跡」島根県教育委員会

松山智弘1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相一大東式の再検討ー」『島根考古学会誌』  
第8集 島根考古学会

松山智弘編1998「市道本郷新宮線道路改良工事に伴う古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書」出雲市教育委員会

松山智弘2000「小谷式再検討ー出雲平野における新資料からー」『島根考古学会誌』第17集 島根考古  
学会

# 図 版

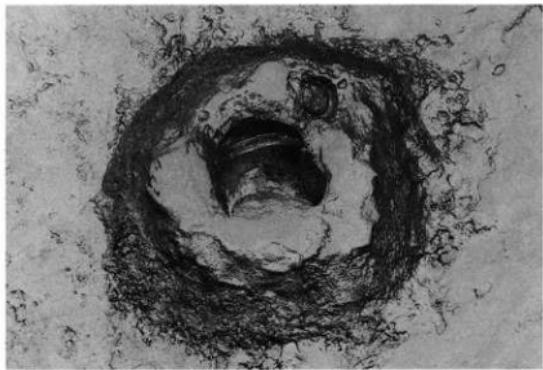
図版1



1区 調査前（西より）

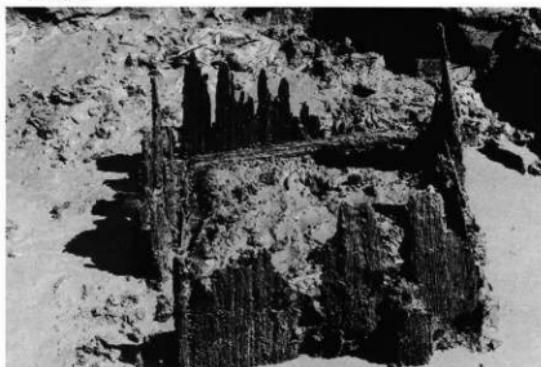


1区 土層



SK01 土器出土状況

図版2



SE01 棚出状況



SE01 完掘状況



土器溜り1 出土状況

図版3



土器断片3 出土状況



土器断片6 出土状況



1区 実掘状況（西より）

図版4



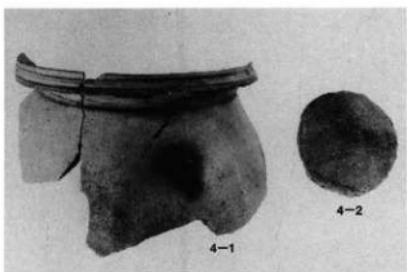
2区 調査前（西より）



墨書き器 出土状況



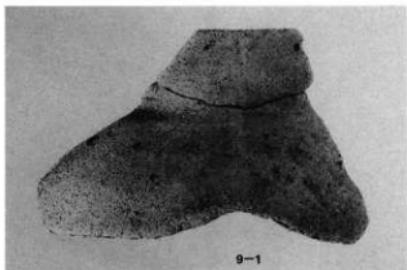
2区 完掘状況（北より）



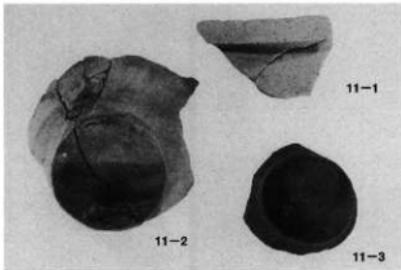
SK01



土器溜り1

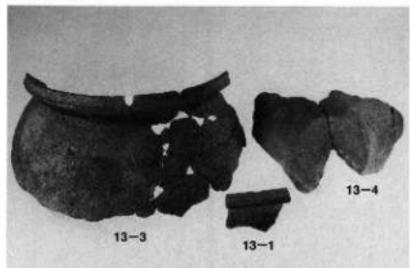


土器溜り2



土器溜り3

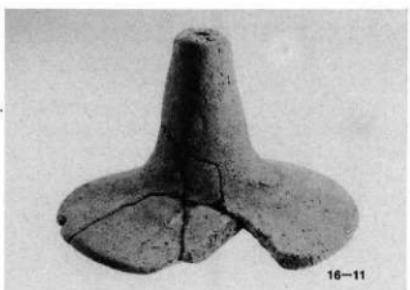
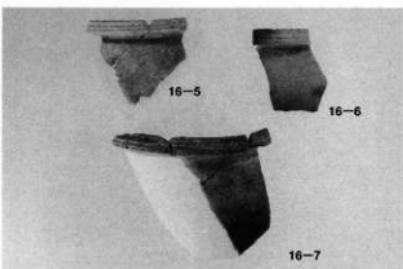
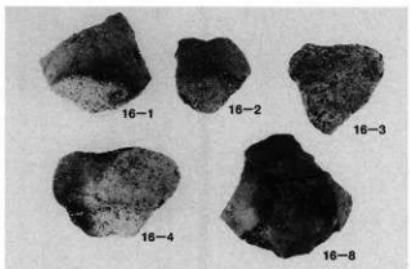
## 図版6



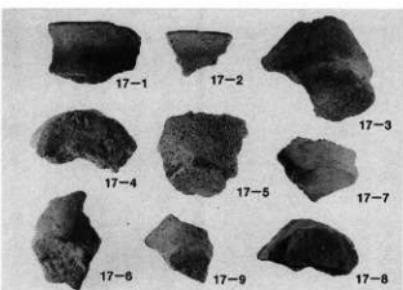
土器満り6



土器満り7

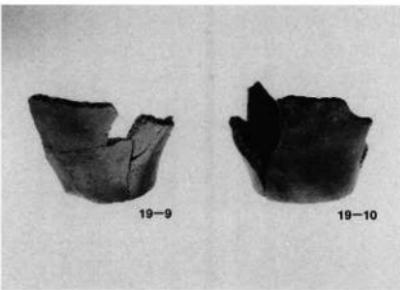
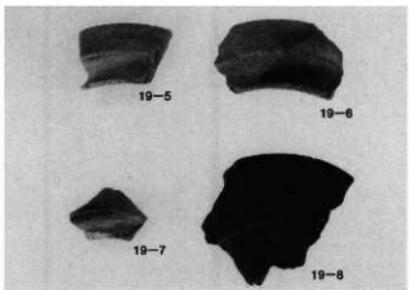
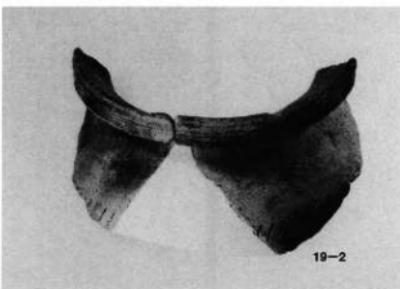
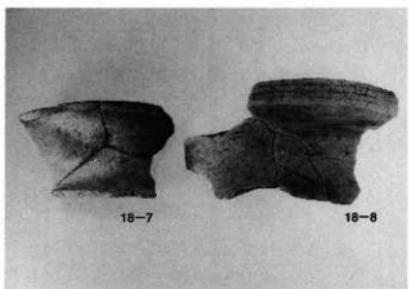
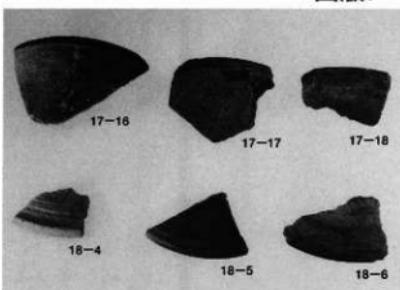
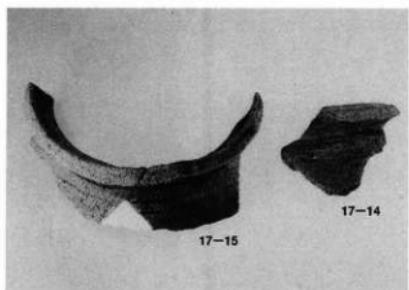


1区4層 出土遺物



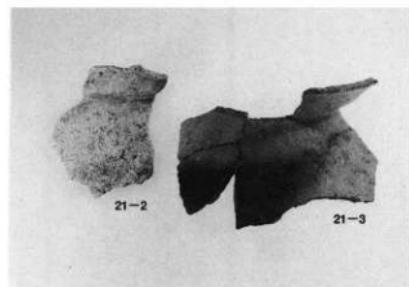
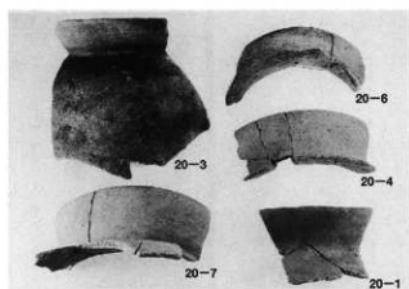
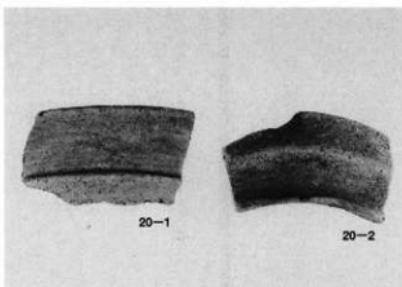
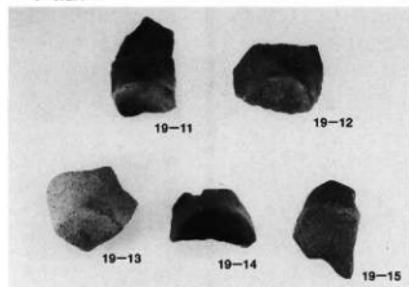
1区5層 出土遺物

図版7



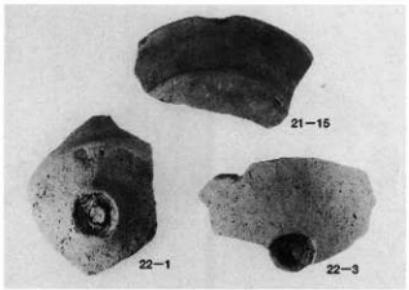
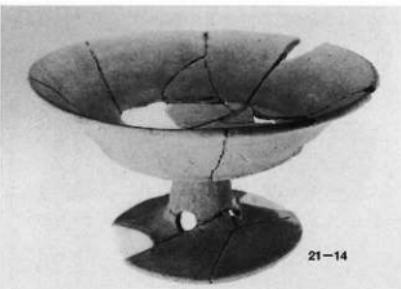
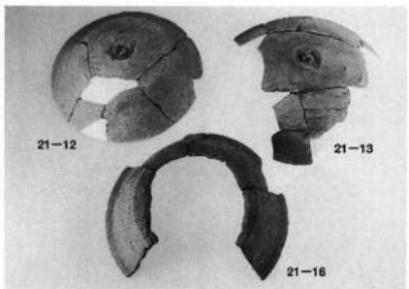
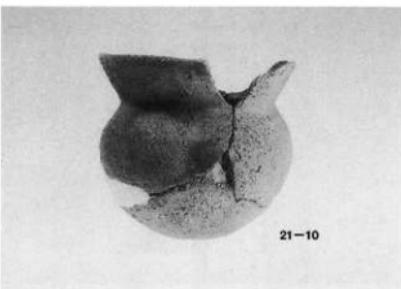
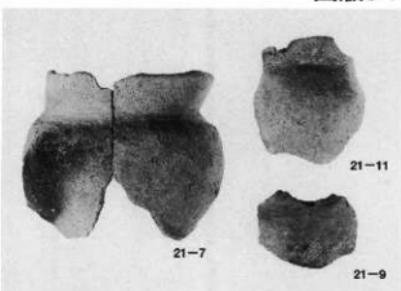
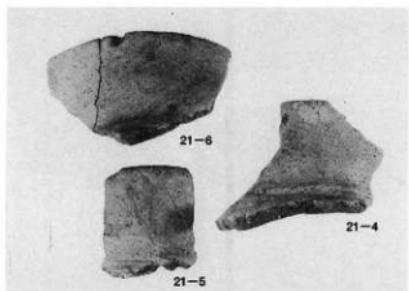
1区 5層 出土遺物

図版8



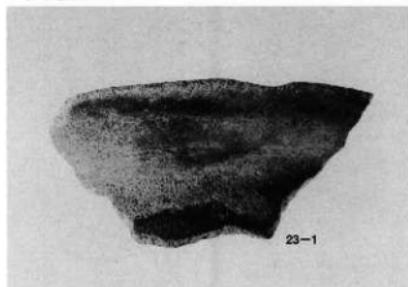
1区 5層 出土遺物

図版9

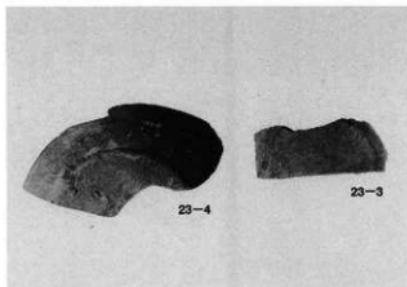


1区 5層 出土遺物

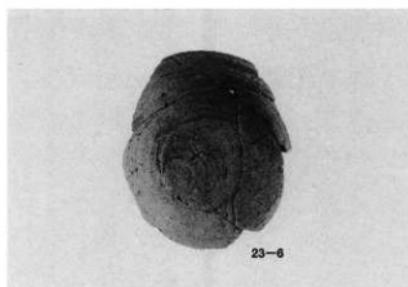
図版10



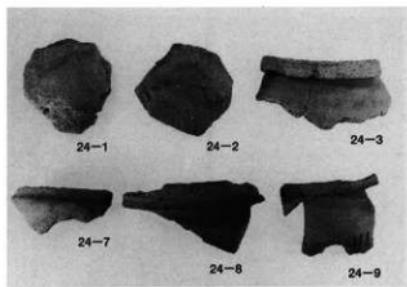
23-1



23-3



23-6



24-1

24-2

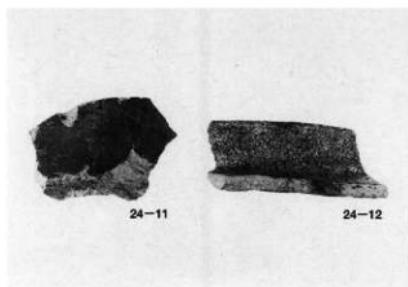
24-3

24-7

24-8

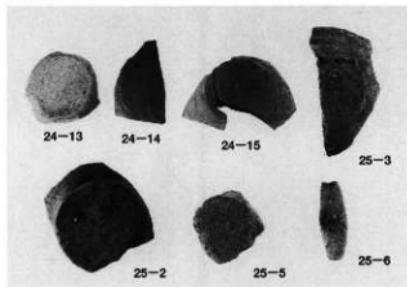
24-9

1区 5層 出土遺物



24-11

24-12



24-13

24-14

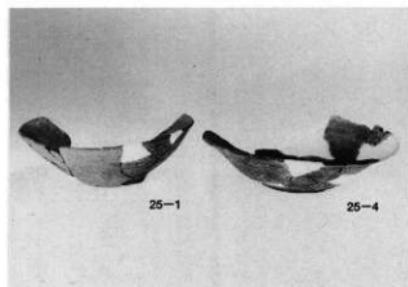
24-15

25-3

25-2

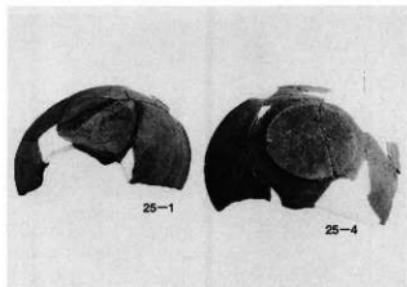
25-5

25-6



25-1

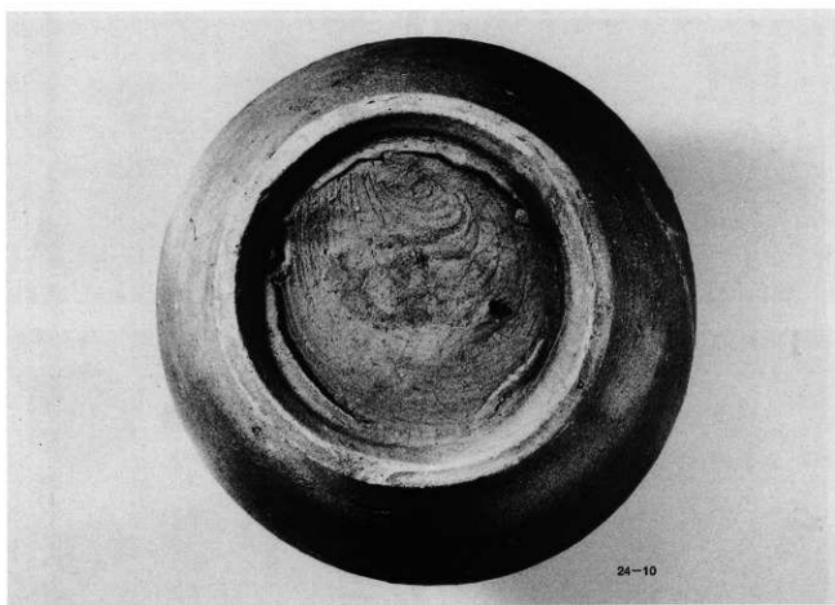
25-4



25-1

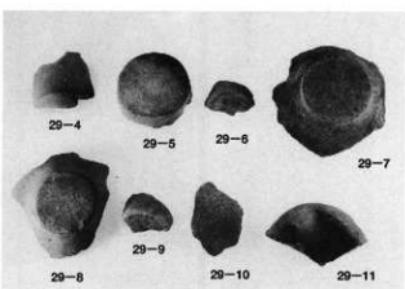
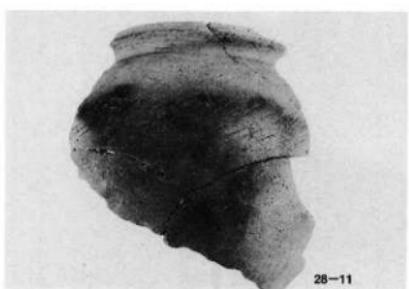
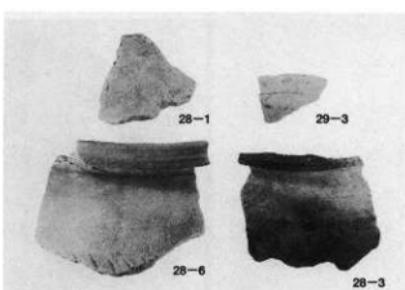
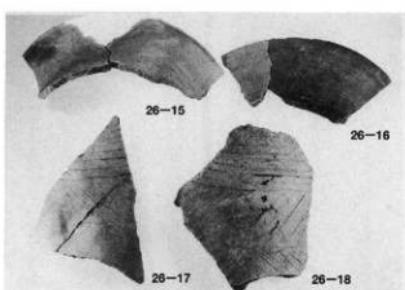
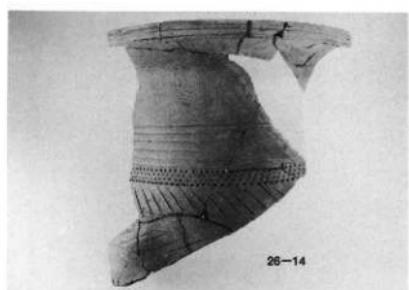
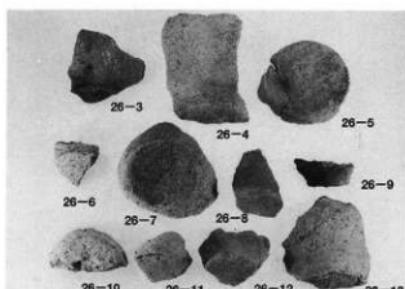
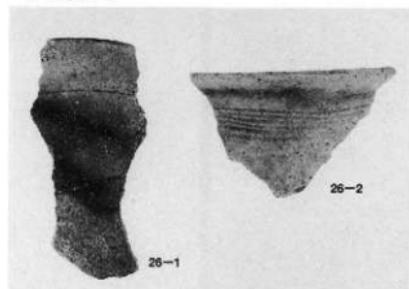
25-4

2区 4層 出土遺物



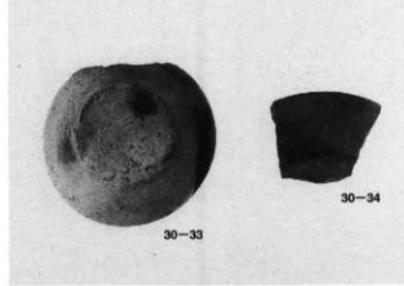
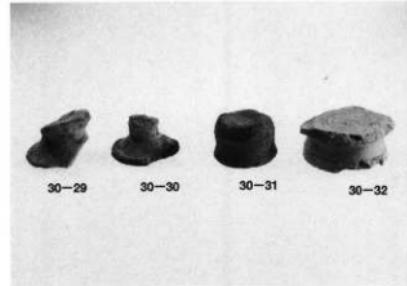
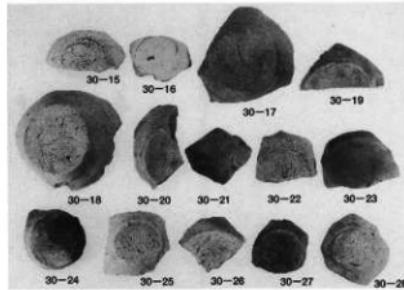
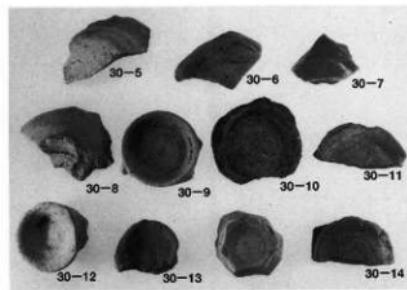
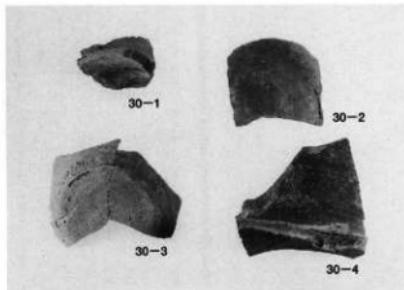
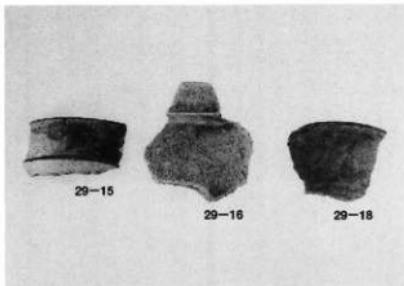
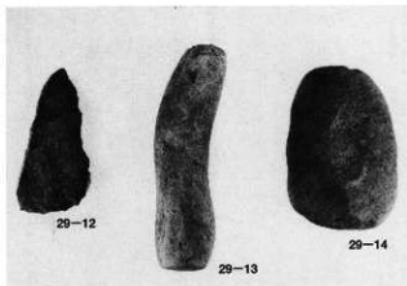
2区 4層 出土遺物

図版12



2区 5層 出土遺物

図版13



2区 5層 出土遺物

## 報告書抄録

フリガナ	ナカノニシイセキ				
書名	中野西遺跡				
編集者名	坂本豊治				
発行機関	出雲市教育委員会				
所在地	〒693-8531 島根県出雲市今市町109番地1				
発行年月日	平成14年3月31日				
所収遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因	
中野西遺跡	出雲市中野町	20000703 ～ 20000914	600m <sup>2</sup>	出雲市北部第二土地区画整理事業	
収容遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中野西遺跡	集落遺跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代	土坑 土器溜り 井戸	弥生土器 土師器 須恵器	焼成時破裂土器 焼成時破損土器 「×」印をもつ土器 墨書き土器

出雲市中野町所在

## 中野西遺跡

—出雲市北部第二土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—

平成14年（2002）3月発行

編集・発行 出雲市教育委員会

出雲市今市町109番1

印刷・製本 さんきゅう印刷有限会社

松江市北田町12